ふのかも知れない。それにしても、こんな世間知らずの妻の良人に對する依頼心を失はせたものは、誰でもない、矢張要吉である。要吉自身が仕向けたのである。要吉は自分が手を下してさうして置きながら、それを罪惡だと感ずる前に、又妻の頼りない心細さを察して遣る前に、自分の身の寂寞に堪へないやうな心持がした。それが他人のせゐではない、悉皆自分の心柄だと思ふと、一層取返しが附かないやうで、寂しさの底が知れない。固より同情には値ひしないが、こんな男でも、矢張り不幸の人の數には洩れまい。

初七日もやがて過ぎた。要吉は毎日隅江の顔を見ながら、何日立てとも言はなかつた。今度立たせて遣れば、それが一生の別れになるやうで、二たび呼び戻すことが自分ながら覺束ないやうに思はれて、何だか歸したくない。少くとも自分からは言出しにくい。こんな風で、一日づゝ妻の歸國を延ばした。勿論隅江の方からは何とも言出さない。

三月、桃の節句が過ぎて二日目、今日は夏子の二七日で、隅江は小母様と連立つて寺詣りに行つた。その後に要吉は一人留守居をしてゐたが、つと立つて障子を開けた。日の入方の空は拭つたやうに晴れて、一塵を留めない。電話線が縞の様に霞んで見える。この二三日は風も吹かず俄に時候が暖かくなつた。海の向うから燕の來るのに間もあるまい。

この平穩な天地に對して、何うも心が落着かない。胸の中の動揺と周圍との不調和が際立つて、宛もなく飛出したい。飛出して、何處迄も一直線に行つて仕舞ひたい。

不圖郵便脚夫の足音がしたやうな氣がして、出て見ると、上框に切手を二枚張つた重い郵書が屆いてゐた。要吉は形容することの出來ない妙な心持で、胸を轟かせながら封を切つた。別に一本の手紙がその中に入つてゐた。王子の友達の許へと轉送を頼んで遣つたが、何と思つたか返して

て來た。あの人の仕さうなことです。今序に送るから讀んで呉れとある。先づそれから開いて讀むと、例の思ひ上つた調子は毎時もと變らない。その中に、「さりとて君は今何を爲したまふか、何を思ひたまふか、我には暗闇の中にて候。互に遠き世の思ひに候。想像せむも怖ろしく候はずや。されど君が眼とわが眼と相會せる時、近寄り難き二つの世に思ひの術なさよりは、却々に今は心易くも覺え候。半月の沈默は自らつくりなせる虚構の世界に對する執着をいよ〳〵增し申候。わが最後の息はこの世界の外ならじと迄誓ひ申候」などと書いてある。今一つの手紙には、「今日は桃の節句にて、主人役に白酒を過して、後の心持惡しく、何をしても後に悔ゆるが私の常に候。悔い得る人は幸なりと人の申せし」と書き連ねて、尙々書きには、この返事は淺草の海禪寺へ宛てて呉れとあつた。

海禪寺と云へば、東都に於ける臨濟の亙刹であるとは、要吉も兼々聞いてゐた。朋子がこの寺へ出入するとすれば——この前の手紙に線香の灰が落ちる音だとか、犬の仔と遊ぶとか、禪學の公案めいたことが書いてあつたのも、折々手紙の中に女らしくない粗大な文句が挿まれたのも、この女の手蹟が男性化してゐることも、そればかりではない、最初からこの女の常軌を逸した振舞が凡て裏書されたやうに思はれた。尤も、こんな疑ひは是迄もたび〳〵要吉の心に泛んだ。が毎も懸命にそれを打消して來た。女の上に自分でつくつた幻影を壞されるのが惜しさに、兩手で捧げるやうにして來た。それ迄にして、漸とイリユージョンをつゞけて來たものを、今女の手づから無殘に壞されては、何とも言ひ様のない心の空虚と、自我の屈辱とを感ぜずにはゐられない。

この女は幻視又は幻聽があるやうに思つたのも、時には癲癇の症狀があるのではないかとさへ疑つたのも、考へて見れば、皆この疑ひを打消すためであつた。この疑ひを打消して、自分の方

へ引附けて置くためであつた。この女が禪學の支配下にあるとは、何うしても考へたくない。縱令相手が人間でなくとも、自分以外の或物がこの女の心を占領してゐると考へるのは堪らない。で、何うかな禪學から引離して、自分の方へ引附けたさに、この女をアブノーマルのものにした。自分の家系が一種の幻視に惱まされてゐるのを顧ては、この女もさうしたかつた。

父の墓畔に縊死した男と出逢つた時、何と言ふこともなく、それが自分の半身のやうに思はれた。大都の眞中に始めて朋子を見た時、何うもそれが偶然に出逢つたものとは思はれなかつた。この日自分と逢ふために、今日迄この世に生きて居たもののやうにも思ひたかつた。そして、只自分だけがこの女を知り得たやうに思つてゐた。

が、何と思つた所で、當人がそれを裏切る氣なら仕方がない。加之、この女は大分參禪が得意なやうでもある。何の位修業を積んだのか知らぬが——自分も禪學の狂信者に用はない。

併し——さう思ふ傍から、又それに逆行するやうな考へがむく〳〵と頭を擡げた。自分は心からあの女を偶像の様に崇拜して來た。あらゆる熱情を捧げて來た。この儘では——何うもこの儘では諦められない。

あれも迷へる女だ。縱し癲癇でないにしても——癲癇は餘まりだから撤回しても可い——あの女の頭腦に異狀があることは爭はれない。あの怖しい程過敏な神經を持ちながら、自家の行爲の責任を知らないやうに見えるのも、或はそれがためではあるまいか。今の世に新しい女は幾許でもある。あの女は普通の新しい女ではない。あの女の言動を裏附けるものが何かなければならぬ。何か暗い影が——黑い日の下に生れて、黑い運命に支配されなければ、こんな女は出來ない。

要吉は机に向つて長い手紙を書いた、これが最後と思つて書いた。先方が幻影を壞す氣なら、

此方にもその覺悟がある。此手紙は只それを壞されまいとする努力に過ぎない、さう思ひながら書き續けた。何時の間にか二人が戻つて來て、隅江が側へ洋燈を持つて來たのも知らなかつた。

啓、久し振にて御狀に接し、例の臆病にて、暫しは封も得開かず、只打眺め居候。それに近頃は事繁く、殘念ながら氣根衰へて、今手紙を書出しても、何を書くやら筆の跡さへ覺束なく候。理性にては、矛盾せる二つのものの同時に存在するを許さずと申せ、感情ばかりは然らず、明かに矛盾せる感情の兩つながら一時に身に迫るが堪へがたく候。

半月の沈默は、君自らつくりなせる虛構の世界に對して執着を增さしめしとのたまふか。さりとてその虛構の世界が何なりやは能くも解らざれど、何が故に今更虛構の世界とはのたまふぞ。君自ら君の世界の眞實を疑ひたまふか。君の世界は恐らく夢ならむ。されど夢の如く眞實なるにあらずや。眼に見ゆる現實の世こそ、夢の如く虛構と成り了れりとは、西の國なる新しき詩人どもの新しく唱ふる所に候。

かくて空想の世界は日に〳〵現實の世界に迫るやうに覺え候。近頃心の中で考へただけのことが、事實となりて現るゝ手續の易々たること、我ながら怖しきばかりに候。時としては、未だ考へても見ぬことさへ、夙くも取返し難き事實として目前に現るゝこと、魔性のものありて人の心を豫知するかと疑はるゝまでに候。

何時ぞや、二人して都を出でむと、霧の街を彷ひ歩きし夜を記憶したまふか。私はあの儘眞實に死ねもし、殺しも出來るやうな心持になりたかりしに候。力衰へてうつら〳〵暮す間には、あの夜のことを思ひ續けて、一時の衝動に依らず、十分なる省慮の結果として、なほ

人を殺すに至る迄わが心の壞れ行くさまを考へなど致候。一種の罪人心理に有之べく候。

今は隱すも詮なければ云ふべし。あの折霧の中を歩きながら、私は――場所も貴方の所好だといふ鎌倉鶴ケ岡の社前にて――貴方を手にかけて殺した幻影を泛べてゐた。その時何ういふものか、私は生き殘つた、生き殘つてゐる必要があるやうに思つた。十二年間――十二年といふに根據はない――樺太なる集治監の氷に閉ぢられても、まだ生殘つてゐる必要があるやうに思つた。――私は詩人である、藝術の徒である、美の崇拜者である。君を殺す、君を滅する瞬間に於て、我戀人は何んなに美しく我眼に映ずるか。總て美しきものはその滅ぶる前の瞬間に於て最も美はしいといふにあらずや。私は許されざるものを見る第一の人であらなければならぬ。

貴方ばかりとは云はぬ。私は貴方を殺したといふことが、私自身の上に及ぼす影響を見たかつた。何物の前にもたじろがぬ科學者の好奇心を以て、自分の心理に及ぼす反應が見たかつた。只、科學の研究は實驗者其人に取つて最も危險なものである。私はその儘永久に歸つて來ないかも知れぬ。そんな事は私の知つたことではない。

或人は近代人の人生觀は厭世でもない、樂天でもない、樂天と厭世との接近であると云つた。極度の愛は極度の憎惡と伴ふ。私は貴方を愛することの深ければ深いだけ、貴方を憎んでゐたのかも知れない。私は貴方の身に殘忍な行爲を加へたい。そこに始めて切なる愛の表現を見出さうとした。埃及のハイペシヤが美しい生身の肉を貝殼で削り取られたやうに――否々、今夜私の頭は平調を失つてゐる。

併し何を言つても、今となつてはすべてを過去の渦卷の中に葬る外はない。

此處迄書きつゞけて、ぽつりと思想の絲が途切れた。頭の中に書きたい事がうぢや〳〵あるやうで、而も何を書かうとしたのか想ひ出せない。卷返して、書いただけを讀直して見た。始め書簡文體で書出して、後の方では言文一致になつてゐる。要吉は眼瞼の熱くなつた眼に、少時紙の上を見詰めてゐたが、その儘引裂ぶいて、ぐる〳〵卷いて封筒に納めた。直に出して仕舞はないと、又思ひ返して出さなくなると思ふから、宛名を書くと共に立上つた。恰度そこへ隅江が夕餉の膳を持つて來たが、

「郵便なら入れて參りませうかなも」と訊く。

「うゝむ」と、それを聞流したまゝ、自分で出て行つた。間もなく、要吉は戻つて來た。膳の前に直された座蒲團の上に坐つて、器械的に箸を上げたが、何を喰つてるか自分でも知らない。時時物忘れでもしたやうに考へ込む。隅江はそれに氣が附いても、故と見ない振をして、凝乎と俯向いたまゝ、膝の上の給仕盆をまさぐつてゐた。

今となつては、總てを過去の渦卷の中へ葬るか。それが要吉の身に剩された一つの課題である。夏子唯、何うしてすべてを過去の中へ葬る外はない。

は世を早くした。恰も意あつて世を早めたやうにも思はれる。この父らしからぬ父は、自分の手を下して自分の前途を闇黑にして行く。それを何者かが居て傍から手傳ふとしか思はれない。何者かとは矢張自分の意志に違ひなからう。人の意志がその人の外へ出て働くこともないとは云はれぬ。故らに或境遇をつくつて、それに着くといふ傾向が止めようとして止められないのも、想ふにそれがためではあるまいか。

何れにしても今は我が身一つを處分すれば可い。何時か――一週間も前であつたらう――或人

の許で清國の四川省に傭教師の口があるといふ話が出た。北京から未だ五十日の餘も蜀の棧道のやうな路をはる〴〵興に舁かれて行かなけりやならぬ所だと聞いて、稍心を動かされたが、その時は何とも言ひ出さないで歸つて來た。一人でそんな懸離れた所へでも行つて、物を言ふ相手もなく、只生きてだけ居たら、その間には口を利くことも忘れ、頭も鈍くなつて、大方片が附くかも知れない。

隅江は要吉が默つて差出した茶碗に、飯を盛つて渡さうとした。

「あ、お茶だつた、御飯ぢやない。」

一寸見返したが、別に湯呑に茶を注いで出した。

要吉は始めてこの女を見附けでもしたやうに、隅江の顏を見遣つた。自分はこの女を捨てようとしてゐる。而もそれが一時の氣紛れではない。それなら未だ恕すべき所もあるが、豫め今日あるを知つて、永い間その計畫を續けて來た。唯、自分は決してこの女を嫌つてゐるのではない。一生を通じて隅江を忘れることはなからう。恐らく眼を瞑る瞬間に於て、自分の口端に上る女の名は隅江を措いて外にあるまい。

やがて隅江は膳を下げようと、背後へ退るやうにして障子へ手を掛けた。

「隅江」と、要吉は女の名を呼んで留めた。

「え」と、振返つたが、相手が何とも言出さぬので、「何ぞ――用で御座いますかなも。」

「うむ」と、又行詰つた。やゝあつて「少し言ふことがあるんだ、眞面目に。」

「今直ぐ？」

「直ぐ。」

隅江は障子を閉めて、その側に坐り直したが、眼の遣場に困つて、凝乎と良人の顏を見返した。

「お前、明日にでも故郷へ歸るか」と、要吉は思ひ切つて言出した。

「へえ」と、言ひ差して、隅江はしばらく返辭をせぬ。

要吉は女の素振を見て、自分の言つた言葉の意味が相手に通じたなと思つた。それと共に、人殺しでもするやうに手が震へ出した。

妻を捨てるのは妻を愛せむがために外ならぬ。要吉は自分にもそれを承認させようとして、幾度も心の中で繰返した。別れて後こそ、妻を愛する心も彌々募るだらう。永く女を愛して變るまいと思へば、その女を捨てる外に道はない。唯、そんなにして迄女は男から愛されたいものか何うだかわからない。それに附けても、男の愛といふものが、愛せらるゝ者のために愛するのでなく、愛する者自身のために愛するのだと云ふことは爭はれない。それが又何うすることも出來ないものであらう。

妻を捨てゝ置いて、妻を愛したい。故らに妻を不幸に陷れて置いて、妻を憐れんで見たい。四川省の山深く分け入つて、永久に歸らなくなつた時、隅江の上を思ひ遣つたら何んな心持がするだらう。固よりこれは半ば空想に過ぎない。但だ空想程世に怖しいものはない。

が、こんなに迄心置なく隅江を虐待することが出來るのは、心の底でこの女を一番深く愛してゐる證據ではあるまいか。尤も、それを又口實にして虐待を重ねようとするのだから、自分ながら淺猿しい。

「隨分お前にも苦勞させたが、もう愛想が盡きたらうね。」

「何故なも？　そんな――」

見る〳〵隅江の睫毛に露が宿つた。それを見ると、要吉の眼も熱くなつた。

「お前には濟まない、眞個濟まない。勘忍してお呉れ、な。」

要吉はつとめて聲を濡ませた。相手が眞面目なら、此方は無理に出さうとしても、心持を仕向けてさへ行けば、涙は自から出るものだ。隅江の顏が霞を透して見え出した。今一息ではら〳〵と頰に傳ひさうになつた。この涙を隅江に理解されようとは思はぬが、切めて女から憐れまれたいといふ一念は失せない。要吉はぢり〳〵と身體をずらして、影になつた自分の顏を洋燈の光に照し出した。

その時、急に涙が出なくなつた。あゝ人の性格は宿業にして容易に改め難い。隅江は終に良人の涙を見ずして濟んだ。

二十八

新橋停車場の古い石造の建物は、雨氣を持つた月夜の空を背にして黑く眠つたやうに立つてゐた。只、北に向つて昇降口だけが明るく見える。折柄二臺の人力車が駈けて來た。石段の下へ梶棒を卸すと、先づ立上つたのは要吉で、續いて隅江も降りた。白い布片に包んだ五寸四方位の箱を、大切さうに兩手に抱へてゐたが、良人の後に跟いて、おづ〳〵石段を上つて行く。

午後十一時の發車には未だ間があるかして、待合室にも二三人の旅客しか見當らない。皆遠方へ行く人らしく、大きな荷物に凭れて坐睡つてゐる。隅江はその前を擦通るやうにして、やつと片隅のベンチに腰掛けた。それを見ると、要吉は直に立つて札賣場の方へ出て行つた。停車場の時計と自分の時計とを合せなどして、何と云ふこともなくその邊を見廻してゐたが、やがて元の

處へ戻つて來た。隅江は膝の上に小さい箱を載せたまゝ、しよんぼり荷物の側に坐つてゐたが、良人の顏を見ると、

「未だ餘程間がありますかなも」と訊く。

「うむ、一時間足らずあるやうだね。」

隅江は默つて眼を伏せた。要吉も並んで腰を下したが、洋杖の頭に兩手を掛けたまゝ何とも言はない。この期に及んで餘計な事を言ふのは、女に對しても氣の毒なやうに思はれたからだ。今夜子供の骨を持たせて故郷へ歸すとはいふものゝ、暫らく別れて暮す約束にして、荷物も當座入るものは大抵纏めて來た。昨夜それを言ひ出した時に、隅江が案外容易く承知したのを見て、一方では重荷を卸したやうにも思つたが、同時に何だか物足らない心持もした。暫らくと云ふ暫らくが何時迄になるか、それは分らない。要吉はこれが永い別れだと思ふ。少くとも空想の上では一期の別れを演じてゐるやうな氣がしてならぬ。それに自分だけは空想の積りで芝居を演つてゐたのが、後からどし〳〵取返しの着かない事實となつた類例は從來の經驗でも數多い。そんなこんなで、今夜八時の汽車で立つ筈であつたのを、外に準備も後れはしたが、要吉からぐづ〳〵と時を後らして、終に十一時にして仕舞つた。併し明日に延ばす心はない。女の一人旅ではあるし、何だか心配だから明日にしてはと、小母さんが强つて止めたのも諾かなかつた。

平生人込みのする待合室だけに、がらんとしてゐるのが一層際立つて見える。もう煖爐も焚かなくなつたのか、白い灰だけが鐵網越しに見えるのも、却てうそ寒い、煖爐棚の上に掛けた大鏡が冷たさうな光を反射してゐる中に、時々白衣の人影が出沒して、宛ら他界の姿を覗いて見るやうに思はれる。要吉は凝乎とそれを見てゐた。長い間鏡の中を見詰めながら、偶とこの中へ自分

と隅江と、二人の行末が映りはせぬかと云ふやう變な心持がして來た。今、自分の側に坐つて、微かな呼吸をしてゐる女と自分との間に、何かの因縁があるとしたら、一瞬の後に別れて、一生の間再び相見る期がないといふ今はの際に、女の行末が自分の眼に映らぬとは云はれまい。

隅江は其處に居るか居ないか分らぬ程、靜かに音もさせないでゐる。要吉は振向いて女の顏が見たいやうな氣もしたが、故とその儘にして女の上を想ひつゞけた。いよ〳〵自分が行方知れずになつて仕舞つたと聞いた時、女は何んな心持がするだらう。恐らくは隅江自身にも解るまい。固より側の人に解らう筈はない。自分にも解らず、人にも知られないで、矢張日が暮れて夜が明けるだらう。一年、二年、三年目には、人の妻となるだらう。又新に人の母と成つて、その日その日の小さい出來事に心を奪はれて暮す間には、何時となく頭に霜を置いて、腰も曲れば齒も落ちるだらう。その時になつて、萬一年寄の夜話に若い頃の話でも出たら、何卒今夜のことが想ひ出して貰ひたい。恐らくはこの女の生涯に唯一のローマンスたるべき自分との關係が、老眼の霞を透して遠い灯でも見るやうに、ちらと泛ぶことがあつたら、その時は——今から願つて置く——數十年前に土となつた自分の上に好意と溫情を持つて想ひ出して貰ひたい。

不圖、足許に聲がしたので振返ると、それは驛夫が水を撒きに來たのであつた。要吉はつと腰掛を離れて、隅江の前を彼方此方と歩き出した。こんな埒もない想像に耽つて、今の別れの重大な意味さへ切實に感じ得られないとすれば、自分ながら何處迄墮落してゐるか方圖が知れない。今夜この女に背いて、明日から何に手賴らうとするのか。われから闇黑を求めて行く。それが最後迄堪へられるものであらうか。こんな單純な女を空想の犧牲とする男の心は、禽獸にあらずして何だらう。自分は怖しい淵に臨んで居る。——泣いて呉れ、人目も構はず泣いて、取縋つて呉

れたら、それに依つて、此處迄切迫した二人の運命を變じ得たなら！　あゝ、自分の方がこの女から憫れまれたい。要吉は腕組をしたまゝ隅江の前に立停つた。何故泣かぬ、何故默つてゐるのだらう。この女には終に空想を容れる餘地がない。

何時の間にか、待合室には旅客が一杯たかつて來た。要吉も切符を買つたり手荷物を預けたりした。間もなく振鈴が場内に鳴り渡つた。ざわ〳〵と人の足音が改札口へ近づいて、雪崩を打つてプラットフォームを押して行く。要吉も漸と隅江を列車の中へ乘り込ませて置いて、窓の前に立つた。

時は刻々に移る。隅江は膝の上の小箱に手を掛けたまゝ、要吉の顏から眼を離さなかつた。今でも——今でも可い、隅江が客車の中から飛び出して來て、泣いて取縋つて呉れたら、そしたら二人は救はれるのだ。要吉は女の顏を見返したまゝ、そればかり思ひ詰めてゐたが、口では他迄何とも言はなかつた。

到頭列車が動き出した。

「それぢや氣を附けて行くが可い。皆樣に宜しく言つとくれ。」

「貴方も御機嫌好う。」

隅江は延び上るやうにした。要吉も五六歩列車に隨いて歩いたが、白いペンキ塗の柱の側に立停つた。と、急に踵を廻らしたまゝ、駈けるやうにして改札口を出た。

夜半に雨垂の音を聞いて、要吉は偶と眼を覺ました。暫く蒲團の中で耳を澄ましたが、

「雨だな」と、獨言を言つた。

程經て隅江が今汽車で雨の中を進行してるのを想ひ出した。今頃は矢張膝の上から小箱を離さ

ないで、ぼち〳〵眼を開いてゐることだらう。これだけ長く抱いてゐたら、肌の暖味が小箱を透して、更に甕を透して、その中の死灰に傳はるかも知れない。要吉は肘を立てゝ、枕の上に顔を伏せたまゝ、夜の白む迄身動きもしなかつた。

二十九

次の日の午後、要吉は久し振りに金葉會へ出て朋子と落合つた。朋子もあの日からずつと缺席して、今日始めて出て來たのださうな。後れて來た男の姿を見ると、一寸目禮したまゝ、二たび正面を向いて、教壇の話に聽き惚れてゐた。二週間あまり見ない間に、元からきやしやな肩の邊りが一層ほつそりしたやうにも見えるけれども、その外には別段變つた容子もない。先般出した手紙の返事も未だ吳れないが、何と思つて何ういふ氣で居るのか、それは解らない。要吉ももう自分の頭を苛なむに勞れたやうな氣がして、わざと他所見をしながら默つて居た。

散會後、神戸と要吉とは朋子を待合せて、一緒に教會を出た。玄關の石段を降りた時、三枝子が澤井を引張るやうにして、後を追うて來た。毎も歸る途とは方角が違ふので、何處へ行くのかと神戸が訊くと、「えゝ、一寸病院へ」と言つたまゝ、取澄してゐる。その邪險らしい白い脣が男の眼を惹く。

で、五人がひろい街の上を横に一列に並んで、がや〳〵言ひながら水道橋迄遣つて來たが、神戸は一人別れて甲武線の電車で歸らうとした。澤井は神戸に隨いて行かうか、それとも三枝子と一緒に歸らうかと、少時迷つてゐたが、三枝子が「左樣なら」と、お叩頭をしたまゝ、ずん〳〵土手について坂を登つて行くのを見ると、

「マア三枝さん、酷いわねえ」と、遠てゝその後を追掛けて行つた。

要吉は朋子と二人だけになつた、一丁餘り默つて歩いてゐたが、壹岐殿坂の下迄來ると、

「彼方へ廻つて歸りませんか――今日も」と言出して見た。

朋子も默つて點頭いた。

要吉は一歩退るやうにして並んで歩きながら、何遍同じ事をしても、何うなるものかと云ふやうな味氣ない心持がした。と言つて、引返す氣にもなれない。不圖、この女は毎日自宅で何をしてゐたらうか、それが氣になつて、

「この間はお雛樣の祭でしたつてね、貴方が主人役で？」

「えゝ。」

「お客樣は何う云ふ連中です？」

「親類の子や近隣の――皆がきやつきや騒いで、そりや面白う御座いましたよ。」

要吉は竊と女の顔を見遣つた。こんな事を言つて、對手の話を外らかすのもこの女の癖だ。

「おや、何ですね。貴方はそんな家庭の行事にも興味を持つてるんですね」と言つたが、又二歩三歩行つてから、「で、お裁縫は誰が爲さるんです？」

「自分のことは自分でするやうにしてゐます。」

何うだかと思つたが、自分でもわざ〳〵自分を欺いて、餘計な事に拘らつてゐるやうな氣がしたので、急に口を噤んだ。

途中、たび〳〵話が途切れたが、それでも湯島へ出て上野公園迄來た。正面の石段を登つて、彰義隊の碑の背後から擂鉢山の方へ、肩を並べて行く。

要吉は一人ぢり〳〵した。何か言ひたい、言はなくちやならぬと思ひながら、妙に心持がこぢれて口へ出ない。

「貴方と會つても、私はもう幸福ぢやアなくなつた」と、打遣るやうに言つて見た。「併し會はずにゐるのはなほ苦しい。」

女は只聞き流した。男は更に言葉をつゞけた。

「この頃中、私は支那へ行かうと思つて奔走したのですが」と言ひ掛けて、不圖、それがこの女に何の關係があるかと、急に又勇氣が摧けた。が、言ひ掛けたことは仕樣がない。「他に人があつて、それは駄目でした。この頃又或本屋の手代にならうかと思つてます。さうなれば勿論、文學なぞとは絶緣して、全く商賈になつて仕舞ふ了簡ですから——私なぞに成れるかなれんか知らぬが、兎に角金葉會へ出て、貴方のお目に掛るのも永くはない。」

「それよりも、肉屋の手代の方が好いでせう」と、朋子は白ばつくれたやうな調子で言つた。

要吉は思はず足を停めた。が、又思ひ返して歩み出した。何故そんな物の言ひやうをするのか。尤も朋子の言葉が枯枝を折つて投げつけるやうに素氣ないのは、今始まつたことではない。それを何か深い意味でもあるやうに迎へて思つたのは、この女が先天的の境遇に魅せられたのだ。一たびそれが他の修養から導かれるのだと知つては、そんな言葉は聞くに堪へない。

やがて、二人は兩大師の廣場へ出た。言ひ合はさねど、足は自ら何日ぞやの夜の石の方へ向つた。偶と見ると、その石には女學生が一人腰掛けて、長い袖の中から襦袢の袖を出したまゝ、何やら讀んでゐるらしい。二人はその側を擦り通つて、右の方へ曲つて行つた。

「そんなことを、神戸君からでもお聞きでしたか。」

「いゝえ」と言つたばかりで、何處から聞いたとも言はない。

要吉は話題を轉じようとして、「ね、何時かのお手紙に淺草の親戚へ行くからとあつたでせう。あれは海禪寺のことなんですね。」

「えゝ、あれはね」と言つたまゝ、少時口籠つてゐたが、「彼處は只私が王子の友達と時々寄つて話をするために、一間借りてゐるんです。そりやア坊主ばかりで、本當に呑氣ですよ。」

要吉はじろ〳〵女の横顔を見守りながら、「ぢや、貴方は坊さんが所好なんですね。」

「えゝ、唯想へば所好です。空に描いて見れば所好ですが、實際見ると大抵は嫌ひです。」

「さう、昔の物語の中へ出て來る僧都や阿闍梨なぞは大概好い。」

こんな風に合槌は打つたが、朋子の才走つた返辭は男の心に餘り好い感じは與へなかつた。何うせもうこの女は駄目だ、何うなるものでないと知りながら、矢張何うがなして、もう一度自分の方へ引寄せて見たさに、

「ね、貴方は——貴方は癲癇の患者が昏睡狀態に陷る際の經驗を聞いたことはないか」と、女の顔を覗き込むやうにしながら言出した。「私はね、貴方は癲癇病者の症候があるんだとばかり思つた。ね、さうぢやないか。私一人でさう考へたのかも知れんが、私は如何しても貴方にさうなつて貰ひたい。」

朋子は默つて五歩行き、又十歩行く。やゝ久しうして、やつと顔を上げたが、「『死の勝利』の中へ出て來る女は、矢張癲癇を持つてゐたやうで御座いますわ。」

久しい以前に讀んだので、それとも心附かなかつたが、矢張知らず識らずの間に並行を求めて

ゐたのではなからうか。要吉は少時物が言へなかつた。

女は氣味よげに男のげつそりした顏を眺め遣つた。

「うむ、さうでしたね」と漸と傾へを立直しながら、要吉は先に立つて歩き出した。

ずつと廣場を一周りして、又元の石の側へ戻つて來ると、前の女學生は何處かへ行つたと見えて、その邊に居なかつた。二人は、石の上に並んで腰を卸したが、要吉は直に又立上つて、前の木柵に凭れた。朋子と顏を見合せる。

あの夜のことが子供の時に見た遠い夢のやうに一つ〳〵戻つて來た。すべてが自分の描いた幻影に過ぎないやうな氣がする。あの夜女が一つとして自分の待設けないやうなことを言はなかつたのも、それがためではあるまいか。兎に角、自分が女の上に小說を描いてゐたことは爭はれない。自分はたゞ女の口から、自分の思想や感情を、自分の言葉と論理とで言はせて、それを樂しんでゐたに過ぎない——

併し今この石に腰掛けた女は、あの夜の女ではなからうか。この手、この酷たらしいやうな、堅く結んだ脣は、自分の心の中に描いた朋子を措いて、他に持つ者はあるまい。——偶と朋子が毎も卷いてゐた毛皮の襟卷を止めて、別の肩掛けを掛けてゐるのに氣が附く。

「あの、毎もの襟卷は何うなすつた」と言ひ掛けて、不圖、天啓のやうに頭の中へ閃くものがあつた。「ね、引裂いた？」

朋子は一寸顎を襟につけて、肩掛をいぢつて見たが、につと笑つて點頭いた。

「何日？あの夜、一ばん終ひに別れた夜？」

「えゝ。」

それ切り、二人とも又默つて仕舞つた。要吉はさうしてゐても氣が落着かない、對手の落着いてゐられるのが腹立しい程落着かない。で、われにもなく「立ちませうか」と言出した。

朋子も直に立上つたが、何やら懶げになよ〳〵として見えた。

二人は又毎もの路を戻つて行つた。要吉は歩きながらも氣が苛つて、何か言ひたい、言つて仕舞ひたいやうに思ひながら、さて何を言はうにも、口へ出せば、皆修辭的になつて、今の自分の心持を本當に傳へ得ないやうな氣がして遺瀨がない。

谷中から團子坂へ降りる坂まで來ると、朋子は急に立停つて、

「先生、今日はお急ぎなんですか。」

「何を？」

「いえ、此方へ廻つて歸らうかと思ひまして」と言ひながら、つと花見寺の方へ曲つた。要吉も默つて隨いて行つた。しばらく行つても、朋子が何とも言出さぬので、

「ね、何うしたのです」と、後から聲を掛けた。

「えゝ？」と、女は顏だけ振向いた。

「何うしたのです。私には解らない。」

「唯あの道を通るのが可厭でしたから、餘まり度々通つたので——」

要吉は何と言ふこともなく自我の屈辱を感じた。だん〳〵空模樣が變になつて、日も暮れるらしい。生墻に添うて、田舍に似た路がつゞく。

「私は一つ何うしても聞きたいことがある。」

やゝ久らくして、要吉は四邊を見廻しながら言出した。朋子は返辭をせぬ。

「これだけ聞けば可い。貴方が九段の上で私に言つたことは――貴方自身のことに就いて――あれは事實か、それだけ聞かせて下さい。」

朋子は啞のやうに默つて仕舞つた。只管路を急いで行く。田圃一面、途の上にも夕靄がかゝつて、しつとりと袂も萎れたらしい。

二人は動坂の上で別れた。別れる時も、朋子は何とも言はなかつた。

三十

明くる朝、要吉はやつと九時前に寢床を出た。楊枝を咬へながら茶の間を覗くと、小母さんは餉臺の上に小皿や茶碗を伏せて、その上に布巾を被けたまゝ、ぼんやり待つてゐる。その儘流元へ降りた。が、又氣を變へて、金盥と手拭とを掴んだまゝ、のそ〳〵と水口から井戸端へ出て行つた。

井戸は門の内側に在つた。門の外を刻限に後れたらしい造兵の職工が、ちらほら通つて行く。要吉は釣瓶の水を汲んで、何度となく頭の後ろを冷してゐたが、やがて雫を切つて立上つた。それから乾れた手拭で摩擦りながら、二たび金盥を下げて戻つて來た。茶の間の毎も坐る所に坐つて見たが、前の日の疲れが持越して、朝から物を喰べるやうな氣はしない。で、型ばかりに箸を上げようとした時、不圖戸口で案内の聲がした。女の聲らしい。小母さんが出て、

「あの失禮で御座いますが、何方樣で」と訊いてゐたが、間もなく顔の色を變へて這入つて來た。

「到頭遣つて來ましたよ。」

「うむ」と、要吉も息を嗚ませた。

「ね、何うします？」

「何うもしない、通すさ。」

かう言つて、自分で出て行つた。土間に立つてゐる朋子と顔を見合せて、一寸どぎまぎしたが、「何卒」と言ひながら、自分の居間へ招じた。

二人は向ひ合つて座に着いた。何方からも何とも言出さない。要吉は、それでも、思ひ掛けない女の來客が氣がゝりで、何うして來たのか、早くその所因が知りたい。が、女の突詰めた容子と、充血した眼の色と、熱病にでも罹つたやうな紅い脣とを見ると、迂濶にそんな事も訊かれない。朋子は目じろぎもせず男の顔を見返してゐる。時々氣にしては、人並よりも引詰めた襟を無理に掻合せた。もう默つてゐるのが息苦しい。

そこへ小母さんが茶を煎れて持つて來た。二人の顔を見較べながら、二たび襖を閉てゝ出て行く。朋子は一寸その後を見遣つたが、

「お邪魔ぢやありませんでしたか」と、始めて口を開いた。

「いえ、そんな事はありません」

その儘又話が途切れさうになつた。要吉は机の上から象牙のペーパ、カツタアを取つて、やけに頬邊へ押附けながら、

「ね、貴方は何う思ふ」と、漫ろに言出した。「神と人間との間には未だしも融通がある。それはさうでせう、人間が神を造つたのですからね。併し人間と人間との間には、それだけの融通すらない。一層神祕的で、一層怖ろしいものぢやアないか。」

朋子は一寸眼を伏せたまゝ、別に何とも言はなかつた。

「が、併し何うすることも出來ない。何うも仕方がない」と、要吉は續いて打捨るやうに言つた。又ひとり呟くやうに、「神が人間を造つたと云ふのは嘘かも知れんが、人間が神を造つたと云ふことは爭はれない。」

何故こんな事を言ふのか、要吉は自分でもよく解らなかつた。が、てれ隠しに強ひて理窟にもならぬやうな理窟を並べた。朋子はそれを辛抱して聽いてゐたが、その眼は絶えず、さうぢやないい、そんな談話をするためにわざ〳〵此處へ來たんぢやないと、不服と輕蔑とを語つてゐるらしい。要吉もそれに氣が附くと、相手の顏を見返したまゝ、俄に口籠つた。一時上氣した血の氣も次第に落着いて、皮膚の底に暗い色を持つた女の顏は、傷つけられた傲慢の象徴たる魔王のやうに近寄り難い。

朋子はなほ四半時間もさうしてゐたが、急に、

「もう歸ります」と言つて立上つた。

要吉はそれを停めるだけの力もない。で、ぐづ〳〵上框まで送つて出ると、女は下駄を穿きながら、男の顏を見上げるやうにして、

「ね、先生は是迄他人の夢を自分が見るやうな氣のしたことは御座いませんか。」

「他人の夢を自分が見る?」と、要吉は只繰返した。

朋子は少時土間に立つて思案してゐるやうに見えたが、急に頭を下げて、後も振向かずに出て行つた。

要吉はそこに突立つたまゝ、ぼんやりその後を見送つた。女の姿が見えなくなると、つか〳〵と居間へ戻つて、のめるやうに机の前に倒れた。又すつくと起直つて、何やら想出したやうに机の抽斗を掻搜してゐたが、やがて片々だけの女の手囊を取出した。未だ眞新しいと思つてゐたが、明るみで見ると大分手擦れがして、指の頭が黑く汚れてゐる。要吉はそれを眼の前へ持つて來て、飽かず見入つてゐた。

女は來た、此處に坐つてゐた。何のために來たのか、それはもう考へたくない、考へるだけの精も根もない。只、あの女に取つて自分は何だらう。要吉は始めてこの問題を自分の前へ出して見た。が、答ふるに堪へない。あの女のために自分は弄ばれ、苛なまれ、又侮られもした。併し愛されたとは——女が自分の上に興味を持つたとは云へようが——愛されたとは、幾許贔屓目にも思へない。それだのに、自分は却て女の冷酷な態度を喜んだ。女が自分に對して冷酷であればある程、却て心を惹かされた。今日迄自分が女に依て與へられたものは、不安と猜疑との長い連續に過ぎない。が、この免れ難い猜疑の去つた時は、卽て女に對する興味の去つた時で、この戀を續けようと思へば、何時迄も猜疑の犧牲となる外はあるまい。畢竟自分は犧牲に過ぎない。而も同時にその目擊者だから堪らない。これが戀だらうか。こんな戀はない。一種の病だ。昔から自分一人の病だ。

併しこの上幾度逢つたところで、矢張同じ事を繰返すに過ぎない。これを始めた者が、これを終らなければならぬ。それには禪學といふものに對する自分の反感を誇大して、二人の關係を茶番にして仕舞ふ外に道はない。只、それが堪へられようか。人は自分を道化視して尙生きられるものではあるまい。

要吉は二たび茶の間へ戻つて、ひとり冷えた膳に向つた。何やら氣抜けがして、物の味も好くは解らない。で、箸を下に置くと、急に小母さんを急き立てゝ洋服に着代へたが、「一寸其處ま

て」と言つたまゝ、街上へ出た。

最初番町の或家を訪ねて、かね〳〵頼んである丸善の口を訊かうとしたが、折悪しく不在だと云ふので、言置をしてその家を出た。新見附の上に立つてぼんやり見渡すと、土手の草が青く萠え始めて、外濠の電車が仕切りなしに往來する。何だか自分だけは社會の傍觀者のやうな氣がして、名狀し難い寂しさが心の底から湧くと共に、ぼか〳〵と脊中に當る日影も侘びしい。衣嚢から時計を出して見ると、針が動いてゐない。時間も分らないが、午刻近い頃だらう。一人坂を降りて行く。

「ひとりだ、人間は終に一人だ。」

こんな言葉を口に出しても考へて見た。實際一人にならうとして閾の上に立つて見ると、一生の長いのが今更のやうに怖ろしい。

要吉は地面を見詰めたまゝ、こつ〳〵洋杖の尖で小石を突きながら、淨瑠璃坂を登つて行つた。かねて隅江を故郷へ歸したら、自分も住み舊した丸山の家を出ようと考へてゐた。寺住ひか、一人者の世話を見て呉れる間借りでもして、生活狀態を一變したい。で、方角の知れない大路小路を宛もなしにぶら〳〵歩いてゐたが、一向目に留めて捜すでもなく、何時しか余丁町の先から郊外の田圃の中へ降りた。

二たび坂を上つて、四五町行つてから植木屋の垣根について曲れば、神戸の住家だ。がら〳〵と門のくゞりを開けたが、格子戸の前に立つたまゝ、主人を喚び出した。神戸は聲に應じてあらはれたが、

「まア這入りたまへ。」

「這入つても可いが、少しその邊を歩かないか。」

「さうだね」と少し考へてゐたが、やがて帽子を被つて出て來た。

二人は鐵道線路に添うて雜木林の中へ這入つた。西に向つて眞直に走る四條の鐵路が、夕日を受けて白刄のやうにきら〳〵と閃めく。要吉は神戸と肩を並べて、久らくそれに見恍れてゐたが、又想ひ出したやうに足を上げた。

「寂かだ」と、一人言のやうに言つたが、「何だか人が懐かしい日だね——終りの日が近づいたやうに。」

神戸は先に立つて歩きながら、不意に、「僕の戀も終つたよ」と言出した。

「何うして」と、要吉は思はず友の顏を見遣つた。

「なに、矢張豫期したやうな結果を見たのさ」と、又一二間前へ出たが「來月學校を卒業すると、大阪の親類へ嫁に行くといふんだがね。僕のことだから、大概それで幕を閉ぢることだらうよ。」

要吉の眼には、昨日水道橋で別れた時の三枝子の容子がちらと映つた。が、別に何と言ひやうもない。たゞ默々として隨いて行く。

やゝあつて、神戸は又言出した。「この間僕がひとり教員室に居る所へ這入つて來てね。始めは唯默つて立つてゐた。それから前の椅子に掛けるには掛けたが、凝乎と俯向いたまゝ、何にも言はずに手に持つた紙表紙の書物をぎり〳〵と捩つて仕舞ふんだよ。それを見た時は、何とも言はれない心持だつた。」

「さうだらう。」

「さうだらうは、少し同情がなさ過ぎるね」と、一寸後ろを振返つた。「尤も、他人の戀といふも

のは同情の出來るものぢやないかも知れない。」

要吉と神戸は顔を見合せて笑つた。が、笑つた後は一層寂しいやうな氣がした。

「それぢや」と、十歩にして、要吉が言つた。「兎に角終つたのは此方だけぢやないと見えるね。唯、僕のは最初から始まらないと云つた方が可い。」

神戸は要吉の顔をじろ〳〵と見詰めたまゝ、「又、君の方から複雑にして仕舞つたのぢやないか。女は單純を望んでるよ。」

「何だか」と、相手の眼を避けるやうにしながら、「僕は何時も胡粉を塗つた張子の岩に凭れて、臺詞をいふ積りで語る戀でなけりや出來ない人間だらうよ。」

「だが、それはね、何んな戀にも幾分かさう云つた要素の含まれないものはあるまい。草刈の戀も、一面から見れば藝術だらうぢやないか。」

「まア何うでも可いさ」と、ぼんやり四邊の野を見廻してゐたが、「それよりも、僕はこの頃どの女にも愛されたことがないやうな氣がしてならんよ。」

「どの女をも愛したことがないからだらう。」

「さう、愛しない者は愛されない。」

何時の間にか、四邊はほんのり黄昏れて、一軒家の障子に灯火が射した。二人は田の中の小徑を辿つて、ばつたり溝に行當つたが、何方を見ても橋がないので、それに添うた畦路を夕闇に包まれて行く。

「おい」と、要吉は背後から神戸を喚んだ。「君は、ド、キンゼイの『鴉片喰ひ』を知つてるか」

「知らない」

「僕も知らない。が、あの頃の連中はラムでもコールリッヂでも皆鴉片を吸入したもんだつてね。」

「うむ、鴉片は好い、少くとも近頃流行のアブサンよりは好いだらう。」

「一寸飲んで見たいね。だん〳〵量を多くするに伴れて、意識が朧朦として、影が薄くなつて行くのは好いぢやないか。」

「漫性の自殺か、それも好いだらう。」

二人の話はしばらく途切れた。

村を一周りして、二たび神戸の家へ近づいた。座敷へ上り込んで、又尻を落着けたが、何うも談話が冴えない。何だか最後の言葉を言つた後のやうな氣がして、別段言ふこともない。

その夜十一時を過ぎて、要吉は漸く友の家を辭した。水道橋迄電車で來て、そこから砲兵工廠の練塀について歩き出したが、角の交番に人簇りがしてゐる。何心なく立寄つて見ると、一人の酔漢が巡査に小突かれて、何やら聲高に喚いてゐたが、手暴く突倒されたと見えて、地面に平這つたまゝ、急に聲を上げなくなつた。死んだものゝやうに口も利かなければ身動きもしない。見物人は詰らなさうに一人散り二人散つた。

要吉も足を留めて見てゐたが、

「この男の遣方の方が手取早い」と、ひとり呟いて、又すたすたと歩き出した。

三十一

桃の花の色を褪まして、春の淡雪が降つた。朝の強い日影に照されて、早や乾きかけた街の上

には、ちら〳〵と水蒸氣の立上るのが見えた。

この日、要吉は小舟町の或銀行へ行つて、取寄せた小切手を金子に換へた。又泥濘の道を大通りへ出て、電車で猿樂町の教會迄來た。今日は此處で金葉會をひらく日である。尤も、女子部は學年試驗を卒へて、二三日前から春の休暇になつた、教會の窓は盲目の日のやうに閉されて、玄關の戸だけ一枚開いてゐるが、會堂の中はたゞ薄暗い。要吉は街の眞中に突立つたまゝ、少時思案してゐたが、つと振返つて、向側の珈琲店へ這入つた。朝の間だから他に客もない、毎も掛ける片隅の椅子に腰を下したが、その儘兩肘を立てゝ額を支へながら、凝乎と考へに沈んだ。

もう一度朋子に逢はうと思つて此處へ來た。二人の關係を終るには、切めて幕切れなりと好くしたい。出來ることなら言ふことも言ひ、聞くことも聞いて、すべて精算した上で二たび相見ないやうになりたい。併しそれは無理な注文かも知れない。實際世の中では、何事に據らず、かうしてぐづ〳〵と片附いたとも片附かないとも分らぬ間に、何時となく濟んで仕舞ふものであらう。それを思ふと堪へられないが、その可厭な心持さへ何時迄續くものでもなからう。人間が絶望するのは未だ好い。絶望の悲哀よりも生き延びるのは堪へ難い。——こんな事を思ひつゞけて、給仕の女が持つて來た珈琲茶碗の冷めたのも知らなかつた。

この時、不意に入口の戸を開けたものがある。要吉は額に當てた手を外して、ぼんやり女の顔を見上げた。朋子は血相變へて齒を咬ひしばつたまゝ、眞直に要吉を目蒐けて這入つて來たが、突然懷中から四角な狀袋を出して、

「今直ぐこれを讀んで頂きます」と、男の前に突附けた。「これ迄の手紙とは違ふのですから——これが私の言へるだけの眞實の心持なんです。今朝からひとり教會の二階にお出でを待つてるました。讀んでお仕舞ひになつたら、何卒彼方へ來て下さいまし。屹度御返辭が伺ひたい。」

かう言ひ捨てゝ、その儘男の返辭も待たずに出て行つた。

懷中の長い手紙は終に出された。要吉はそれに手を懸けたまゝ、少時思ひ煩つたが、思ひ切つて取上げると直ぐに封を切つた。一尋に餘る卷紙に苛々した鉛筆の走り書きがつゞく。

先達て不意に御宅へ伺ひしこと、何と思召し取り下さつたでせう。私はもう堪へられなくなつた。是迄先生を欺き、自己を僞つて、心にもなき言葉に行爲に、飽迄自己を晦まし得る積りで居りましたが、もう駄目です。私は無殘に敗れた。血と肉との續く限り爭つて見ましたが、もう自分で自分を制御することが出來なくなつた。この前お目にかゝつてから今日迄、一週間は全く夢中で生きて居た。徹宵靜坐も續けて見たが、何の甲斐もない。昨日は朝から家を出て、王子の友達に會ふ積りで海禪寺へ行かうとしましたが、途中で會つても仕樣がないと云ふ氣が射したから、圖書館へ這入つて、一日人と物を言はないで暮らしました。今日も一人目白園へ行つて、彼處の欄干に凭れて、網の樣になつた木の間から冬ざれの田圃を瞰下してゐたが、矢張何うすることも出來ない、何うしても日頃の冷靜な自己を取返すことが出來ない。で、又ふら〳〵と其處を出て、宛もなく街の中を彷ふ間に、二三度も轉げて路上に倒れた。その儘意識を失つて、再び立たなかつたらとも思つた程です。

この頃は家の者も心配仕出したので、取分け母の顏を見ると氣の毒で堪へられませんから、今夜も早くから自分の居間へ閉籠つて、誰が來ても動かないやうにしてゐますが、私はもう駄目だ。先夜の夢は戻つて來た。何度でも繰返して執拗く戻つて來る。空虛な夢は終に肉附

けられねば止まぬ。もう抵抗する力がない。私は永遠に失はれた。

私は失はれた。この手紙は胸に取返しの附かぬ痛傷を受けて、死者狂ひになつた女が最後の努力である。書く、書く。この上は只書けるだけ書いて、一歩でも先生に接近する道を求める外はない。

何日ぞや先生は私をスフインクスのやうな女だと仰有つた。先生はもうおぼえて被坐しやらないかも知れない。が、何故私はスフインクスのやうな女にならなければならぬか。敗北したことを切りに感じたからです。私はスフインクスのやうな態度を裝つてならば、何時でも先生と握手する資格がある。けれども、今これを書く間は、先生と眼と眼を見合せることは迚も出來ない。私の苦痛は私の口から誰に向つても言へない、無論言つた所で同情同感などして吳れる人がある筈もない。私には友達もない、家もない。一人で堪へて來た、最後迄闘ふつもりで生きてゐた。若し私に自分を非我の地位に置いて觀察する習慣がなかつたら、疾うに狂したか、今頃は何うなつてゐたか分らない。唯、私は一方パツションに驅られて動いてゐると同時に、他方には餘裕のある我が見て居た。餘りに怖しい迄勃發しさうになると知つた時は、大抵意力で制御して仕舞ふ。私は自分を制御する上に始終坐禪の力を藉りてゐる。私は禪の思想を口にする資格はない、只自分を制御する上に使つてゐる。何日ぞや御同行した日暮里の兩忘庵は、私がたゞ物好きから彼處へお連れ申したとでも思つて被坐したかも知れませんが、あれは私が三年前夢中になつて坐つて見性した所なのです。それで先生と闘ふ時、あの家を一度見て置きたくなつたのです。先生もお聞き及びでせう、釋宗活と云ふ坊さんを。

けれど〳〵、それももう駄目です。私は最後迄來て仕舞つた。最早私には何物も殘されない、あるものは只恐怖と不安との連續である。靜に自分の最後を味はつて死ぬと云つたけれど、それさへ今の狀態では覺束ない。もう叶はぬ。私は先生の御手にかゝつて死ぬ——殺して頂く。

勿論、日夜そればかり考へた上で極めたのですから、この決心は動かぬ。只一つ遺憾なのは、私が死んでから先生が何う變化して行くか、それを見ないのが殘念で堪らないのですけれど、かうなつた上はそれも仕方がない。思ひ切る外はない。

三月十九日夜半

小島先生　御許に

この手紙は直接手から手へ渡すべきものだ。

一昨日の眞夜中に書いたものらしい。要吉は一旦ずつと眼を通して、又始めへ戻つて二三行讀み掛けたが、わな〳〵と震ふ手に捲返した。終にその日が來た。自ら招いた總ての力の壓迫を一身に受ける日が來たと思ふばかりで、頭の中は白紙のやうに何の考へもない。何の感情も動かない。不意に帽子を取つて立上つた。又想ひ出したやうに紙入から珈琲の代を出して拂つた。その儘後をも見ないで街の上へ飛出したが、急に足を緩めて、

「殺せと云ふのは、斷念せよといふ他の言葉ぢやないか」と、われにもなく呟いた。

兎に角教會の玄關を這入つた。二階へつゞく梯子段を絞首臺へでも上るやうに、一段づゝ刻ん

で、俛首れながら登つて行く。その時上からも朋子が降りて來た。互にそれと知りながら、なほ一足づゝ近づいて、二人は梯子の中程で行逢つた。要吉は下から女の顔を見上げた。見る〳〵女の眼瞼の下から大粒な涙が持上つて、はら〳〵と頰から襟に傳はつた。朋子はそつと欄干に凭れて顔を背向けたまゝ、それを拭はうともしない。要吉は目の當り人間の魂の苦痛を見るやうな氣がして、暫らく物が言へなかつた。無言の間に五分間經つた。やがて男は女の顔から眼を離さないで、一歩退つた。朋子も一歩隨いて來た。二人は梯子段を降りて、こつそりその下の扉をあけて這入つた。

人氣の絶えた會堂の中は、人の肉を得て、急に四方から陰森の氣が迫るやうに思はれた。要吉は椅子を引寄せて、女の座を設けたが、朋子はそれに掛けようともせず、男の傍に立つてゐた。少時して、要吉は口を開いた。

「お手紙は——確に讀みました。」

女は涙を一杯溜めた眼に男を見返したが、只點頭いて見せた。

「貴方に接近するためなら、私は何んな事でもする。何んな事でも躊ろがぬ積りだ。唯、あれぢや未だ解らない、あれだけぢや——」

朋子は屹となつた。

「ね、あれだけぢや」と、要吉は言葉をつゞけた。「あれ以上言へないのか、あれより外に言つて吳れることは出來ないのか。」

女は凝乎と睫毛を伏せたまゝ、何とも言はない。要吉は苛々しながら女の返辭を待つてゐたが、何時迄も默つてゐられる苦しさに、

「それぢや聞かない、强ひて聞かなくとも可い」と投出すやうに言つた。「私はどうせ何にも知らずに貴方に隨いて行くのでせうよ。」

朋子はつと男の腕に取縋つた。男は片手を出して支へながら、「只、あの夢とは？　夢とは何です。」

一歩背後へ蹌けたまゝ、女は凝乎と男の顔を見詰めた。

「あの夢とは、手紙の中の夢とは？」

「それを私の口から——」

「言へない？」

女は點頭いた。がたりと椅子の倒れる音がして、折重なるやうに、二人の脣が合つた。

「私は負けた。あゝ、もう私は——」

女は男を押退けるやうにして立上つた。

この女の愛は——愛はこの女に取つて勝利でなうて敗北である。自分がこの女から愛せられるのは、この女が負けた時である。血汐の中にのた打ち廻つてゐる時である。そんな風で愛せられるのが何の嬉しからうぞ。要吉はデレマの上に立つた。少時敵意を有つた眼に女の顔を見据ゑてゐたが、「それぢや」と、不圖何やら想ひ着いたやうに、前へ乘出して、「何日かの朝私の許へ飛んで來たのも——」

「矢張惡い夢に魘はれた後でした。」

男はたゞ息を詰めた。

「そりやア生死の爭ひだつた——海の暴風雨の樣に怖ろしい」と、女は夢見るやうにつゞけた。

「私はもう一人で生きることが出來ない。」
「二人で生きることも――？」と、要吉は相手の顔を覗き込むやうにした。女は石のやうに動かない。
「何故、何うして？」
「この上生かして置くのは餘り酷い。一日生きてゐれば、一日だけ悲慘な死方をするだけです。」
かう言つて、思はず延上るやうにしたが、「先生だけは知つてゐて下さると思つた。それでなけりや上野の森で、あんな眞似は出來ない。」
「上野の森で？」
「解つたでせう」と、塔から飛び下りるやうな聲音で言つた。「私はもう自分の疾病と爭ふのに勞れた。私の運命は氷の墓か、癲狂院か。二つに一つを選ぶ外はない。」
火かさらずば氷――それは最初にこの女から聞いた言葉だ。それぢや、この女の正體は火であつたのか、火は駄目だから氷に着くと言つたのも、さう云ふ意味であつたのか。火が火に着けば、自から亡びる外に道はあるまい。
「それで」と、要吉の聲はかすれた。「それで氷の墓を選んだのか。」
「先生も――」、と、朋子はそつと顔を背向けながらつゞけた。「私を癲狂院へ送るやうな、そんなお心持はないでせう。」
要吉は默つて女の項を見詰めた、人並外れて思ひ上つた女が、自他の辨別もなくつて、鐵の棒を立てた檻の中で荒れ騒ぐ――そんな怖しい將來の運命を明かに見ながら、ぢり〳〵と自分を制御する力が衰へて、負けて、狂つて行く。それを又自分で眼を離さず見てゐる。何といふ怖ろし

い奮鬪をこの女は續けて來たものだらう。而も一人で、全く一人で、絶望的に――實際、最後の勝利は氷の墓の外はない。
要吉は默つて手を差出した。朋子はつとその手に縋つたが、その儘男の膝に顔を埋めた。それが如何にも狂人の殘忍な心から、相手を誘惑して同じ道に引摺り込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死にさせねば置かぬと云ふやうに見えた。
何れにもせよ、自分は犧牲に過ぎない、この女の犧牲に過ぎない。
「私は殺せる、貴方なら殺せる。」
他から促されでもするやうに口走つた。この女を失ふまいと思へば、この女を殺す外に手段はない。朋子は眼を上げて、屹と男の顔を見遣つたが、二たび顔を伏せたまゝ、聲を立てゝ獻欷く。要吉は手を拱いて女の泣き止むのを待つてゐた。その間、少し落着いたのを見て、
「その日は？」と、小さな聲で訊く。
「何日でも、先生の好きな時――」
「早い方が好い、」
女はむつくり起直つて、少時考へてゐたが、
「明後日の朝十時迄に、寂禪寺へ來て下さいまし。私はそれ迄に其處へ參つて居ります。」
朋子は起直つた序に、袖で涙を拭いて、居坐ひを正した。要吉も並んで腰を掛けたが、身體が甚くがつかりして、恰度二人が難船して無人島の荒濱へ打上げられたやうな氣もした。何も言ふことがない。玄關から吹込む風に煽られて、入口の扉がばたんと大きな音を立てゝ閉まる。又開いて、又閉まる。二人はそれに見恍れてゐた。

やがて朋子が振返ると、自分の顏を見てゐられたので、眼に露を有つたまゝ、につと唇を綻ばせたが、二たび男の腕に凭れようとした。

「もう此處を出ようか。」

「えゝ。」

二人はそつと立上つた。金葉會の連中が申合せたやうに出て來ないので、會堂の中はひつそりとしてゐる。で、玄關を降りようとした時、何かに躓いたと見えて、朋子はよろ〳〵と地面に膝を突いた。髮の毛の根元迄顏を赧らめながら、袴の泥を拂ひ〳〵立上るのを見遣つて、

「え、負傷をしない？」

「いゝえ」と、傍へ寄つて來て、「この頃は好く轉ぶんです。」

何やら想ひ出したやうにくす〳〵笑つてゐた。要吉も片頰に笑ひながら、一町餘り一緒に來たが、町の曲角迄來ると

「ぢや、此處で」と立停つた。一人になつて考へたかつたからだ。

朋子は泥濘の道を一文字に歩いて行く。少時、その後姿を見送つてゐたが、又ぶら〳〵飯田橋の方へ向つた。一人になつて見ると、又何がなしに淋しい。未だ言殘したことがあるやうな氣もして、後を追掛けて見ようかと思つたが、思ひ返して止めた。

飯田橋の上に立つた時、不圖、今朝出掛けから見舞ひに行く心算でゐた、或亡友の遺族のことを想ひ出した。今度その友の遺稿を出すについて、本屋との交渉も略纏まつたから、旁々それを知らせに行くのだ。その人達は牛込の奥に住んでゐた。で、ぶら〳〵神樂坂を登りながら、要吉の眼には去年の夏爛れたやうな炎天の下に、こつそり友の柩を送つた寂しい行列が泛んで來た。

友は人を愛せず、又人にも愛されなかつた。大學を出て間もなく死んだので、その名を記憶する人も有るまい。今頃遺稿なぞ出されるのは、故人の本意でないかも知れない。自分も——萬一そんなことになつたら——後に何物も殘したくない。嘗てこの土の上に足跡を印したことがないかと思はれる迄、綺麗にこの世から忘れ去られたい。

友の家では母屋を他人に貸して、裏の離座敷めいた小家に住んでゐた。阿父さんは非職軍人とかで、緣側に火桶を抱いて坐つてゐたが、眼だけぎよろりとして、むくんだ顏が何處やら病人らしい。要吉の來意を聽いて、やつと安心したやうに重たい口からぽつ〳〵自家の事情を語つた。死んだ息子ばかりでなく、その兄弟が皆虛弱で、後から〳〵と一人づゝ取られて行く。この後に男の子とて季の弟一人しかない。で、健康やら活計上の都合やらで、近く一家を擧げて沼津へ引越すのださうな、こんなじめ〳〵した話を聽いてゐながら、要吉は妙に心が浮ついてゐた。何だか自分の役でない役目を勤めてゐるやうな氣もした。

その家の門を出た時は、ほつと息を吐いた。枳殼の垣根についてそろ〳〵足を運びながら、兎に角、生前にすべき事を一つだけ濟ましたやうな氣がした。同時にそれだけ前途が詰つたやうな氣もした。何時の間にやら日もとぼ〳〵と暮れて、空は曇つたのか暮れたのか、毛筋のやうな雨が降つてゐる。

それにしても——要吉は二たび女の上に戻つた。それにしても、あの女の言ふやうな、そんな事があり得やうか。長い間心に被さつてゐた重荷の除れた嬉しさに、一も二もなく女の言ふことを承認して來た。けれど、女の言ふ通りだとすれば、あの女は——何日ぞやあの女の口づから、自分は女でない、何うしてもそんな要求の起らない身體だと聞いた。それとは全然裏腹だ。が、

それ迄にして女が男を醜弄する――何うもそんな事は考へられない。「女でない」と言つたのも、只わが身の苦しさに、さう云ふ境地を夢みながら辛うじて生きてゐるのだとすれば、極端から極端に走るあの女の性癖として、さのみ不思議ではない。それに上野の森で見たあの女の狂態も、強ひて女の言ふやうに解すれば解されないでもない。が、それにしてもエロトマニヤとはあんなものだらうか。何うもさうは思はれない。あの女にしても、あの怖ろしい多感性が自制を困難にして感情の暴ぶがまゝに任せた時は、自分ながら不安の念に堪へないこともあらう。それがために苦悶が内部に湧いて、烈しい倫理上の葛藤に對する不完全な渇望から、自分を動物性に墮落したものと想像して娯しむ――そんな事がないとも言はれない。若しさうだとしたら――それだけの事だとしたら――

が、併し――と、やゝあつて又考へた。あの女の狂氣を此方から癒すことが出來ないとすれば――あの女を自分の手から離すまいとすれば、あの女をあの女の言ふがまゝに狂氣にして置く外はない――あの女の言ふことが事實にもせよ、想像にもせよ、何方にしても同じ事だ。自分はたゞ一刹那あの女と同化し得れば可い。只一瞬間、それに依つて萬事休す矣。

實際、自分は女を殺さうと言つた。そんな怖ろしいことを口にする自分は、それぢや怪物か。いや、犧牲に過ぎない。あはれな牲に過ぎない。あの女はあの女自身のために死ぬ、死はあの女に取つて一種の勝利である。それに自分は――自分はあの女を手に掛けるかも知れない。が、殺されるものはあの女ぢやない、自分自身である。あゝ、自分は今日迄他人が自分のために死ぬものだと思つてゐた。自分が他人のために死なうとは夢にも思つてゐなかつた。何んなローマンスに於ても、自分が主人公に成れると思つた、脇師の役を勤めようとは思はなかつた。が、それも成

行なら仕方がない。只切めては自分が死んだと聞いたら、後から隨いて死ぬ女の一人位はありたい――要吉は後に遺して行く女の顔を一人々々心に泛べて見た。そして小雨に濡れながら江戸川の終點に立つて、ぼんやり電車を待つてゐた。

松ケ枝町で電車から下りた時は、雨がぴしよ〳〵と降出した。頭からづぶ濡れになつたまゝ、明神下の横町を曲つて、お種の家の格子戸の前に立つた。こと〳〵といふ足音を聞附けたのか、上框の障子を開けて、羽織を着た女がすらりと立つた。

「まア大變！」

お種は大仰に男の姿を眺め遣つたが、下駄を穿いて、格子戸の樞を外して呉れた。

要吉は默つて土間へ這入つた。上框に腰掛けて、雨水に濕つた靴を脱ぎにくさうにして脱いだ。女が外套を受取つて緣側の竿に掛けに行つた間に、茶の間へ通つたが、灯火が一つ點いてるばかりで、誰もゐない。お種は戻つて來て、遽てゝ座蒲團をすゝめた。

雨はしと〳〵と降る。要吉は氣味惡さうに何度も半巾を出して、頸筋の邊りを拭つた。お種はそれに氣が附いたが、平時と容子が違つてゐるので、時々男の顔を偸むやうに見遣りながら、その譯を聞かうともしなかつた。要吉も別に說明しようとはしない。

「姉さんは？」と、少時して口を開いた。

「今一寸お湯へ」と、背後を見返つたが、又元の通りに向直つた。

「皆さんお變りはないか。」

「えゝ相變らず。」

要吉はもう何にも言ふことがない。何のために此處へ來たのか、自分でも解らなくなつた。折

柄、又格子戸の開く音がした。お種の姉が湯から上つて來たものらしい。茶の間の障子を開けて、何氣なく顔を出したが、

「おや、被入しやいまし」と、下町の主婦さんらしい丁寧な挨拶をして、「御免なさいましよ」と會釋をしながら、前を通つて、緣側へ糠袋や濡手拭を掛けに行つた。

やがて又茶の間へ戻つて來て、長火鉢に寄添ひながら

「何だか鬱陶しう御座んすね。おや、濡れたまゝで被入した？　何故着代へて頂かないんだえ。あれが未だ一度も手を通さないから、内のあれが好いよ。」

「私なら直ぐ歸るから」と、要吉は口を挿んだ。

「まアお宜しいでせう。内も直き歸つて參りますから、今夜は何卒御寛り遊ばして。」

「姉さん」と、お種は姉の顔を見て、「あれは何うなの？この間阿母さんが持つて來たのが、今日漸と仕立上つたから、未だ重しが掛けてあるけれど。」

「さう、そんなものがあるんなら早くお出しなさりや可いのに。」

お種は向うの部屋へ行つて、仕立板の下から銘仙の袷を持つて來た。要吉が去年着たのを洗ひ張りに出したので、何日の間にか此處へ持つて來て仕立直したものと見える。要吉もそれを着て見るやうな心持になつた。で、立上つて手を通すと、姉妹二人がゝりで仕附絲を取つて呉れた。姉はなほ袖だの裾だのを引張つて見て、

「好い、好い、よく出來た」と一人言のやうに言ふ。

お種は下を向いて脱捨てた洋服を褶むでゐた。

こんな夜は小さい時分の事が憶ひ出されると言つて、二人の姉妹は火鉢に金網をかけて、かき

餅を燒いた。お種は割合に言葉少なにしてゐたが、姉は一人ではしやいだ。要吉もとう〳〵十時頃まで居た。始終自分が何うしてこんなにしてこんな話がしてゐられるかと疑ひながら、矢張ぐづぐづと相手になつてゐた。そして、何も言ひ出さないで、柱時計が十時を打つのを聞いて立上つた。

雨傘をさして寢鎭まつた町の中へ出た。物足らぬといふ感じの外に何も殘らない。何と思つて女に會ひに行つた。たゞ女の涙が見たかつた。女が遺骸の上に注ぐ涙を生前に見て置きたかつたのだ。併しこんな不純な心持が本當に死を決した人の心に泛ぶものであらうか。眞個要吉は死よりも死が齎すものを望んでゐたらしい。

三十二

中の一日は、朝からじめ〳〵と雨が降り續けた。要吉は居間に閉籠つて、これ迄自分が關係した仕事の中で、早速片附けて置かねば他人の迷惑になるものだけを調べにかゝつた。平氣で死ぬ準備をすると云ふことに、一種の興味をおぼえながら、傍目も振らず手と目とを働かせた。小母さんは一二度茶を煎れて持つて來たが、それも邪魔になると思つたかして、直に引退つた。夜の十一時頃迄に漸く一通り片附いたので、茶の間へ行つて見た。近頃は小母さんも年を取つたのが目に立つ。努めて何かと話しかけたが、頻に睡さうで氣が乘らないやうに見えた。洋燈も油が乏しくなつたと見えて、幾度心を上げて見ても、見る〳〵四邊が薄暗くなつて行く、要吉は云ふべき言葉もなく、老婆の疳せて陰影になつた顔を眺めてゐた。間もなく居間へ戻つた。

その日は來た。雨上りの空が蒼く晴れて、樹の枝に露が滴つた。彼岸の入りだと云ふので、小

母さんは心ばかりの用意をした。要吉は平時の様に朝飯の膳に向つたが、何氣ない體で、「今日は千葉迄行つて來ようと思ふが」と言ひ出した。

「千葉へ？」と、小母さんは眼を睜つた。

「急な用事が出來たから」と、遽てゝ言譯をしながら、「今夜は歸らないかも知れんが、明日は屹度歸る。」

直に立上つて身仕度をした。小母さんは呆氣に取られながら手傳つた。

要吉は小母さんの氣が附かぬやうに、一昨日銀行から受取つた金子の折半と、それが用途を指圖した一封の手紙とを用箪笥の中へ入れて置いた。

門外迄つか〳〵と急ぎ足に出て、一寸橋の上に立停つたが、その儘後を振向かなかつた。

三丁目から電車に乘つて、淺草の門跡前で降りた。わく〳〵しながら、松葉町の寺を訊ねて行くと、海禪寺は容易く分つた。門を這入る時、偶と自分は此寺へ何しに來たのだらうと思つた。何しにとは要吉が最も考へるのを恐れた所だ。成るべくなら終ひ迄自分が何をしてるかも忘れてゐたい。

境内は閑かに、一株の老松が四邊を支配してゐた。只、左の方に學校か寄宿舍か、ペンキ塗の不恰好な建物が見えて、庭に石炭殼を敷いたのが稍うとましい。

要吉はぼんやり玄關の前へ立つた。衝立を一枚立てた切りで、明放しだから奥の方まで見透せるが、森として物音一つしない。二三度聲を掛けても、誰も應ずるものがない。不圖、朋子は來てゐないのぢやないかと云ふやうな氣がした。本當にあの女が來てゐなかつたら、最初から自分を瞞したのだとしたら——只自分が瞞されたといふだけで、實際には何事も起らずに濟む。未だ

それにも晩くはない。——要吉は衷心自分がそれを冀つてゐるやうな氣がして、思はず後を振返つて見た。

その時、腰衣を着けた若僧が一人舗石の上を横切つて駈けて行く。喚び留めて、これ〳〵の人はと訊くと、直樣心得て走つて行つた。女は矢張來てゐるらしい。

間もなく廊下の向うから、朋子が小走りに出て來た。敷臺へ降りて一禮したまゝ、二人は顏を見合せて立つた。やゝあつて、

「おや」と要吉は片足引いた。

「少し、少し待つて下さいまし。友達が來てゐますから、一寸さう申して參ります。」

要吉は默つて點頭いた。朋子はその儘引返したが、やがて二たび現れた。

玄關を降りる時に、朋子は小さい女靴を穿いた。服裝は二人が始めて水道橋で出逢つた日に着てゐたものらしい。

二人は門を出た。要吉は何處へ行くとも告げないで、前に立つて歩いた。門跡前から藏前の通りへ出て、須賀橋詰の或銃砲店の前迄來ると、つとその店へ立寄つた。少時經つてその店を出たが、路傍の柳の下に待合せた女の側へ來て、

「ね、拳銃は賣るが彈丸は賣らないさうです。近頃新聞なぞの廣告を見て、警察の認可證がなくとも可いことになつたんだらうと、一人極めに極めてゐたんですが——」と言ひながら、何だか自分の行爲がわざとらしいやうな氣がして、女の手前恥かしかつた。要吉のつもりでは、只かうして自分をぐん〳〵引返し難い境地に連れて行きたかつたのだ。

「さうでせう」と、女は平氣でゐる。

「さうだ、貴方に訊けば分るんでしたね。お宅には屹度ある筈だ。」
「えゝ、ですが父の居間に所藏つてあるんですから。」
二人は足の向いた方へ宛もなく歩いて行く。
「それでなけりや不可ないんですか」と、やゝあつて、朋子は一言づゝ區切りながら言つた。「短刀なら、私が持つてゐますが。」
短刀！　要吉は右の腕が痙攣するやうに覺えて、竊と自分の掌の甲を見遣つた。
「此處に？」
「直ぐ自宅へ歸つて取つて參ります。」
男は稍躊躇らつた。
「是非それにして、是非――私はそれが好い」と、女は急に子供の强請るやうな容子をして見せた。
「ぢや、私は何處で待てゐませう？」
女は腫れぼつたい眼瞼を伏せたまゝ、少時考へて、「停車場なら、田端が一番近いんですが！」
「田端に？」
二人は落合ふ先を約束した。それから又電車に乘つて、上野山下まで來た。男は人力車を傭つて女を載せながら、
「貴方の來るまで、私が耐へさせられる苦痛を記憶えてゐて下さい。」
朋子は眼で點頭いた。女の乘つた車は見る間に屏風坂の方へ走り去つた。
それを見送つたまゝ、要吉は二たび上野の停車場へ出て汽車で田端へ來た。

崖についた坂を上つて、道の二筋に分れる處に、一軒御休憩所とした家を見附けた。二階へ上つて見たが、氣ならぬまゝに又その家を出た。その邊の雜木林の中へ這入つて、小路といふ小路を隈なく歩いた。
午後一時になつた。前の家へ戻つて見たが、朋子は未だ來てゐない。何よりも考へるのが怖ろしいので、又引返して村の中へ這入つた。裏の菜畑の中に的を設けて、白髮の隱居と酒屋の御用聞きらしいのとが夢中になつて大弓を引いてゐた。其處にも久らく立つて見てゐた。
何時の間にか、空がどんよりと曇つた。一歩二歩と村を出て、われにもなく駒込へ行く道を辿つた。この邊は一體につい先頃迄田圃の中であつたが、兩側に新しい借家が建つて、だん〳〵町を形造つて行くらしい。今も屋根に梯子を掛けて、「酒醬油卸小賣所」と筆太に看板を書いてゐる男があつた。犬が二疋駈けて來て、往來の眞中に咬み合つてゐたが、又向う裏の空地へ駈けて行つた。何だかこんな些細な事にも心を取られるのが自分ながら可厭しい。
駒込避病院下の坂まで來て、一寸立停つたが、又徐々上つて行つた。
避病院の側の細い路を曲つて、板塀の盡きる所迄行つて見たが、又中途迄引返した。塀に添うて立てた往來安全の角燈の下に、長い間行き所のない人間のやうに佇んでゐた。衣嚢から卷煙草を取出したが、生憎燐寸がない。四邊は日が暮れるやうに薄暗くなつて、霰が二つ三つ帽子の緣を掠めてはら〳〵と降つた。又半町許り歩いて、駄菓子だの草履だのを賣る店の前に立つた。裏口まで見透せるやうな小さい家だが、火の氣の無い火鉢の側に、六つ許りの女の兒がしく〳〵と泣いてるばかりで、店の人は居ない。
「燐寸をお吳れ。」

女の兒は兩手を離したまゝ、戸口に立つた人の顏をじろ〳〵眺めてゐる。

「燐寸をお吳れでないか」と、要吉は故と微笑むやうにして言つた。

つか〳〵と立つて薄汚れた手に燐寸を掴んで差出した。

「幾許？」

「一錢お吳んな」

要吉は藪口から錢を出して拂つた。其處を去つて、富士神社の前から吉祥寺の通りへ出た。雨まじりの霰がばらばらと降つては、又小止む。

町の角に小さい稻荷堂がある。此處を曲れば、朋子の家に一町とはない。一寸足を留めたが、顏を見知られぬを幸ひに、その家の前まで行つて見ようかと云ふやうな心持になつた。二三歩足を移した時、そこの人力車宿からつと一人の女が出て來た。女は朋子だつた。平常着に紅い帶を締めて自宅の使ひにでも出たものらしい。

朋子は男と顏を見合せたまゝ、側へ寄つて來て、「十時迄には屹度出て參りますから——十時迄に。」

何やら酷く昂奮してるやうに見える。要吉は唯默つて點頭いた。そして直に踵を返した。女も急いで戻つて行つた。

男を待たせて置いて、平常着に變へて平氣で自宅の用をしてゐる。要吉も變に思はずにはゐられない。が、一旦家へ戻つたら、そんなに容易く出られない事情もあらう。それには又家の人達に油斷をさせる必要があるかも知れない。さう思ひ返して、女の言ふがまゝに待つことにした。

が、それにしても——要吉の考へは再び同じ所を彷つた。此處で若し朋子に逢はなかつたら、

二人の運命は何う變じたらう。それは自分にも解らない。何だか此處で逢つたと云ふことだけが、二人の運命を支配してゐるやうにも思はれる。併しかうなつた上は仕方がない、仕方がない。

十時まで——それ迄は何處かに時間を消さなければならぬ。やがて追分へ出たが、今朝出た丸山の家も程遠くない。あの家にも六年近く棲んだ。他所ながらもう一度見て行きたいやうにも思はれる。が、それと心を決し兼ねてゐる間に、又大學の前迄來た。

「二たびこの土を踏むことはあるまい」と、そんな思ひを味ひながら、街の上に立つて見渡した。不圖、向うから一人高い襟をした男の遣つて來るのが眼に着く。要吉を見て、遠方からにや〳〵笑ひ掛けたが、通りすがりに帽子を脫つてお叩頭をした。自分を知合と思つてゐるらしい。

何と思つたか、要吉は青木堂へ寄つて、ウイスキイの大壜を購つて下げた。又三丁目へ出て、切通しの坂から池の端の賑やかな街を拔けて、二たび上野の停車場へ着く。汽車に乘つて田端へ戻つた。

崖の家の二階へ上つて、障子を開けると、冬枯の樹の間から八州の平野が見渡される。窓の閾の上に肘を突いて、暮れて行く空と野原とを見守つた。

「この日は二たび來ない。自分は取返しの出來ぬ一歩を踏み出した。」

こんな感じが莽々と胸に迫つた。自分はこの日を失つた、過去を失つた、總ての持てる物を拋つて、一瞬時に殉じようとしてゐる。その一瞬時は未だ來ないのに、既に總ての物を失つた。生れて、この日ほど取返し難いと思つたことはない。

要吉はつと立上つて、薄暗くなつた部屋の中をぐる〳〵と廻り出した。そこへ女中が洋燈を持つて來た。で、又その前に坐つたまゝ、凝乎と火影を見詰めてゐた。死刑囚が刑の執行を俟つ間

の苦しみは何んなものか知らない。要吉は一生の間にこの一夜を經驗した。

やがて又女中が膳を持つて來た。づぶの山出女と見えて、何かと物を言ふたびに、いツいゝゝゝと身體を搖つて、殆ど聲を立てないで笑ふ。それが側の目にも苦しさうに見える。要吉は可厭な心持がしたので、箸を附けたまゝ、直に膳を下げさせた。

又一人となつた。死の覺悟して、ひとり火影に對する人の心持はこんなものだらうか。昔から死んだ人の心理を書いたものはない。あれば皆、死なない人の書いたものだ。自分は死なゝい人の空想を實現しようとしてゐる。死を決したから總ての物を捨てたのぢやない。死を決するために總ての物を捨てたのだ。何を捨てゝもあの女の運命について、最も重大なものを我手に握りたいと思ふ。唯この思ひに、人間に許されざることを敢てしようと決心した。この決心は他迄動搖しない積りだ。唯、この決心が動搖しなければしない程、何ういふものか、それが不合理で、奇怪で、てんで遂げられないことのやうにも思はれた。勿論自分では、一番善い道を執つてゐる、この外に執るべき道はないと信じてゐるのに、自分の意志に反して、そんな心持が絶えず頭を擡げた。が、これ迄自分の生涯は一つとして此處へ到着する準備でないものはない。一歩々々此處へ近づいて來たのだ。今日迄の何れの日も取返されないやうに、明日も最早動かされない。運命は二人を連れて行く處迄連れて行かねば止むまい。

が、併し――と、要吉の心は再びわれに反つた。此處迄出て來てから、なほ運命に依頼し、相手に依頼してゐる自分は、何といふ卑怯者ぞ。この上は只朋子が待遠しい。早く朋子が來て呉れれば可い――

九時を打つた。要吉は外套を被つて戸外へ出た。木下闇の暗い坂を降りて、停車場の時間を見に行つたが、十時五分に高崎行の終列車があることを見定めて戻つて來た。この家の勘定を濟まして、何時でも立たれるやうにして置いて、壁に凭れたまゝ眼を閉ぢた。

戸外の夜風が耳に附く。幾度か物音に驚いて立上つた。最後に一輛の人力車の駈けて來る音がして、坂の上で停つたかと思ふと、車夫が聲高に物を訊ねる聲がして、車上の女の聲も交つた。

要吉が梯子段を駈け降りた時には、車夫が氣立ましく大戸を叩いて、女中が遽てゝ戸を開ける所であつた。朋子は黑絨のコートを着て、せい〳〵息を切らしながら土間へ這入つて來た。

二人は二階へ駈上つて、少時顏を見合せたまゝ、何とも言ふことが出來なかつた。

朋子は終に親の家を棄てた。要吉は人の世に許されざる罪を犯した。あゝ、二人とも失はれた。女は男の腕に身を委れたまゝ長く離れなかつた。

「ぢやア直ぐに。未だ終列車には間に合ふ。」

朋子は點頭いた。その儘二階を駈け降りて、戸外へ出たが、終列車は恰度凄じい音を立てゝ停車場へ着く。二人は轉ぶやうにして暗がりの坂を降りた。停車場の入口へ着いた時、死ぬ場所と云ふことがこの間際になつて急に頭へ泛んだ。

「山か、海か。」

要吉は聲に力を込めて叫んだ。

「山」と女は一言答へた。

直ぐに切符賣場へ行つて、西那須驛行の切符を二枚買つた。

女はこの時既にプリツヂを渡つてゐた。要吉は後から走り着いた。車掌が二人を乘込ませて、

礑と戸を閉めた時、汽車は動き出した。

二人は車室の片隅に座を占めて、ほつと息を吐いた。二三の旅客は頭を擡げて此方を見遣つたが、何やら懶げに呟いて、又背後へ凭れるのも横になるのもあつた。何だか沙漠をうろついて、陰商の天幕の中へでも闖入したやうな心持である。

汽車は武藏野へ出た。平野の暗闇を劈いて走るので、車輪の音が一層大きく聞えた。それが遠く遠くなるかと思ふと又自分の身體の上へ突掛けるやうに大きくなる。天井から下つた薄暗い洋燈の光を見詰めてゐると、汽車は前へ進むのか後へ退るのか分らない。

その薄暗い洋燈の下に、殺す人と殺される人とは無言で相對した。女の顏は影に包まれて動かない。男は二たび殺されるものは女ぢやない、自分だと思つた。女が憎い、汽車はこの二人だけ乘せて暗闇の中へ突入つたまゝ、再び歸らないやうにも思はれる。

やがて大宮へ着く。要吉は女を促して汽車を出た。明日の朝汽車を待つて東北へ向ふ積りである。他に行くべき場所も手段も殘されないやうに、此處で降りたのは何のためか分らない。二人は停車場を出て大通りを一町許り行つたが何處の家も寢鎭つてゐる。唯一軒大戸を開けた家を見附けて、その二階へ上つた。

要吉は女中が出て行くのを待兼ねたやうに、何か言出さうとして、不圖、女の容子に眼を留めた。女は座蒲團の上に端然と坐つたまゝ、一人で考へてゐる。何を考へてゐるのか、それも解らない。が、そんな筈ぢやない、何うもそんな筈ぢやない、――折角言ひ掛けたことも言ひそゝくれて、少時手持無沙汰にしてゐたが、やがて、

「二人とも失はれた。今夜は再び返らない」と、獨言のやうに言つて見た。

「今夜ぢやない」と、女は自分の前を見詰めたまゝ「最初お手紙を頂いた時から、私は二たび取

返されないと思つてゐた。」

要吉は思はず女の顏を見返した。何か言ひたいと思つても言ふことがない。少時して、

「お宅ぢやもう知れたらうか。」

「今夜は大丈夫でせう」と言つて、やゝ俯向き加減になつたが、「表の方から出ようとすると、一寸開けても門が鳴るやうになつてますから、裏から出たんです。夕方雨戸を自分で閉めて、わざと一枚だけ殘して置いて――」

「それでお家の方の氣が附かない？」

「えゝ、でも少し狹過ぎたから、それを開けるのに氣が苛つて、大變でした。」

男はうつそり女の額を見詰めた。この女の無教育な小娘らしい仕業を聞くのが、譯もなく心嬉しい。

「今日途中で逢つた時は、何をして被坐した？」

「彼岸だもんですから牡丹餅を作らされちやつたんです。」

それを聞くと、要吉は始めて女の家庭に面したやうな心持がして、何とも言はれなくなつた。

「一週間許り私の容子が變だものですから、內の者も氣を附けてゐるので、故とそんな事をして遣つたのです。」

かう言つて、少時考へてゐたが、「私はついぞ子供なぞを抱いたことがない。それが子供にも分ると見えて、偶には抱いて遣らうと言つても、向うから嫌つて抱かれないんですが、今日は何うしたのか急に抱いて遣りたくなつて、姉の兒を遊んで遣つてゐると、餘り强く抱き締めたもんだから到頭泣出して仕舞つた。」

女の話が目の前に見える。要吉は胸をとゞろかせながら聽いてゐたが、「で、その姉さんと云ふは、何んな方？」

「姉は私と違つて、母に似て好い女なんです。」

「貴方には一人のお姉さんでしたれ。」

「私が子供を抱いてると、姉が母の側へ行つて、私のことを、何だか平常のやうぢやない、彼方の部屋で泣きかけてゐたと、そんな事を言つて告げるんです。それが聞えた時は——」

「その時は？」

「それだけで可いのです」と、朋子は急に言葉を切つた。

そこへ宿の男が寢床を伸べに來て、序に火鉢を下げようとするから、もう少し置いて行つて呉れと頼んで見たが、「へえ、もう一時を打ちましたので、階下でも就寢みますから——それに、近頃は火の用心が惡う御座いましてな。」

幾度頼んでも、ねつく同じ事を繰返してゐるので、煩いから、その儘持つて行かせた。

「ね、就寢みませうか」と、要吉は後を見送りながら言つた。

「何卒、私はかうして居ますから」

男は思はず女の顔を見遣つた。何と思つてそんな眞似をするのか。女はかうして一身を衞らうとしてゐる。それだけなら未だ可い。この期に及んでなほ自分をそんな男だと思つてゐられたら——もう取返しが附かない。が、まさかこの女にそんな事もあるまいと思ひ返して、

「えゝ、それぢや私も起きてゐませう。」

春の宵ながら、夜深けては底冷えがして、曠野の一つ家の樣に四邊が森とした。二人は膝を突

合せたまゝ、少時物を言はなかつた。やがて、

「あれは、あの物は持出された？」と、男の方から訊く。

女は默つて、左の手に懷を抑へて見せた。

「それぢや、この包みは？」

「先生からのお手紙が這入つてる。」

「最初からの？」

女は點頭く。男は微笑みながら手に取上げた。

「私、先生に濟まないことをしました。」

「何を？」

「あの『死の勝利』を、日記だの、その外いろんな物を庭で燒棄てる時に、つい間違へて火の中へ抛り込んで仕舞ひましたから。」

要吉は再び女の顔を見詰めた。

「その方が好い」とは言つたが、何うも知らずして燒いたものとは思へない。星月夜の下に、女が半身を火影に照されながら、反古を燒く姿が眼に泛んだ。

「貴方は始終日記をつけてゐるのか。」

「えゝ」と、女は微かに點頭いたが、「私には本當に談話の出來る友達がないから、友達と談話をする代りに日記を書く。そして三箇月位に燒いて仕舞ふんです。」

「何故？」

「その位經つと、自分が書いたもののやうな氣がしないから。」

朋子は急に默つて仕舞つた。

今夜家を出る前に、女は手紙と一緒に燒くつもりで、久しく捨てゝ置いた日記を取出した。一枚づゝはぐつて行く間に、不圖、一月末の或日の下に眞黑に塗消した跡を見附けて、胸を騷つかせながら、遽てゝその前後を讀んで見た。あゝ、あの日から始まつた、あの日から――だが、こんなにして自分にさへ隱さうとした事を、何うして男の前に打明けたのか、男の手に自分の生命を委ねたのか。矢張り自分は弱かつた――左樣思ふと堪らない。男に對する女の憎惡はいよ〳〵容赦がなくなつた。女は自分を滅した男を滅さずには置かない。

日記の反古が白い灰になつたのを見濟まして、女は筆を執つて二三行書下した。

我生涯の體系を貫徹す。われは我が cause に因つて斃れしなり。他人の犯す所に非ず。

三月二十一日夜

眞鍋朋

今一枚には

拜啓、我が最後の筆蹟に候。今日學校に行きませんと申せしは、實は死すとの事に候。願はくば君と共ならざるを許せ。君は知り給ふべし、われは決して戀のため人のために死するものに非ず、自己を貫かんがためなり、自己の體系を全うせむがためなり、孤獨の旅路なり。天下われを知るものは君一人なり。我が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事

を許せ。さらば。

明治四十一年三月二十一日

宛名は王子の友にした。併し讀ませるのは相手の男であつた。自分が息絶えて、男の心の中の記憶と化した後、この遺書を讀んだとしたら、男の失望は何んなであらう。若し又光の薄い獄窓の下で讀んだとしたら、恐らく悶え死なゝい者はあるまい。女は自分の死後になほ男の運命を支配する力を自覺して、唇を嚙んだまゝ、片頰に刄のやうな冷笑を泛べた。

朋子は今その時の形相を自分ながら眼に見るやうな氣がした。何でも可い、もう何でも可いから早く決行して仕舞ひたい。

「出ませう、早く此處を出ませう」と、俄に男の腕を掴んで飛立つやうにしたが、又うつとりと坐り直した。

わが生命を爆發させて、相手の生命を碎かうとする。男は女がそんな恐ろしい報復の手段を執つてゐようとは知る筈がない。

「何うしたのです、え。」

「いえ何うもしない」と言ひながら、朋子はぼんやり座敷の隅を見詰めた。

隣の室か、それとも一つ置いて向うの室かであらう、野獸の寢てゐるやうな鼾の聲に交つて、時々齒をきしむ音が聞えてゐたが、

「あゝ」と、不意に遺瀨のない女の聲がして、

「もう間に合はない」と明白に聞えた。

二人は思はず顔を見合せた。後はむにや〳〵と寢惚けた欠伸に代つて、鼾の音もはたと止んだ。曉方近い空氣は身を斬るやうに人の肌に迫つて來た。

「お寒かアありませんか」と、やがて女は襟を掻合せながら言つた。

「えゝ」と、要吉も一寸女を見返したが、頭の中へ群がつて來る感想を掃ふやうに、「ね、談話をしませうよ。貴方の小さい時分の話をして下さい。私は未だ貴方のことは何も知らない。」

「小さい時分の？」

「二人が現在してゐることとは、全然關係のないことが可い。」

朋子は少時默つてゐたが、

「私のこれね」と襟に刺した燻銀の襟留を弄つて見せて、

「五つの時から失くさないで持つてるんです。」

「そりや何です」

「四葉の苜蓿でせう。これを持つてる者は何だと云ふぢやありませんか。」

「えゝ？」

「心迄も捧げるんだつて」と、一人で笑つた。

「私は知らない。で、それを？」

「父が佛蘭西から歸つた時、土產に呉れたのです。これと女持の時計とを姉妹の前へ出して、お前の方が小さいから、何方でも好きな方を先へ取れと言はれて、私は此方を取つて仕舞つた。」

要吉はまじ〳〵とその襟留を見詰めたまゝ、默つて聞いてゐたが、女の言葉が途切れたので、偶と眼を上げてその顔を見遣つた。

「それからもつと外に。」

「えゝ、姉はその時分から私に親切でしたが、私は矢張いけない質の女でした。」

かう言つて、女は男の眼を避けるやうに、顔を背向けながら、「何日かも姉が大切に飼つてゐた金絲雀を殺して仕舞つたことがあるんです。矢張七つか八つの頃でしたらう。何を怒つてだつたか、今は記憶えてゐません。姉の居ない間に鳥籠の中へ手を突込んで、金絲雀の頭へ留針をぐつと打込んだら、二三度ばた〳〵と羽翼を動かした切りで、鳥は死んで仕舞つた。血も出ないし、和かい毛が被さつてるので、留針も分らない。到頭何うして死んだか知れずに仕舞つた。今でも未だ私が殺したとは誰も知りますまい。」

「今でも」と、要吉は息を詰めた。

「併し姉はもうそんな金絲雀のことなぞ忘れてゐませう。」

男は兩手に女の兩手を把つた。そして、始めて見るやうにしげ〳〵女の顔を見守つた。

遠方で一番鷄が啼く。

三十三

やがて宿でも起出たと見えて、階下ががたつき出した。ばた〳〵と廊下を歩く草履の音も聞える。要吉は何度も女を呼んで見たが、皆忙しさうにして返辭をしない。

「何うしたのでせう。昨夜一番汽車で立つからと言つて置いたが」と、又時計を出して見ながら、「もう汽車の着く時間ですね。」

朋子も何やら落着かぬらしい。で、

「この儘立ちませうか」

「えゝ。」

二人は身仕度をして立上つた。

街には朝靄がかゝつて、未だ人通りはない、人力車の立場らしい家の軒から一本の竿が出て、その頭に汚ない旗が濕とりして垂れてゐる。楊枝を咬へた男が車の輪を拭いてゐる。

停車場の振鈴が鳴る。二人は遠てゝ駈附けた。プラットフォームに立つて、待つ間程なく、上野發の一番列車が霧の中から現れた。

二人は又北に向つて行く。朝の夙いためか、同乘の客は肥つた商人體の男一人切りで、大きな革鞄に凭れたまゝ、昨夜の夢を續けてゐた。時々手枕の肘を外して、ぼんやり赤い筋の張つた眼を開くが、直に又うと〳〵と寢附く。

二人は湯丹婆の上に足を擂へて腰掛けてゐた。晨朝の寒さは一しほ身に徹へる。

「これを着ては」と、要吉は手に持つてゐた女のコートを差出した。

「いえ、これで可いんです」と、朋子はそれを受取つて、「ぢや、かうしませう」と、言ひながら、二人の膝の上に被けた。

その下で二人は手を繋いだ。

何時の間にか、客車の中へ朝日が射し出した。霜枯れた田圃の上に、煙の渦が影を落して、千疋の猿が狂ひ廻るやうに後へ〳〵と轉がつて行く。要吉は久らくそれに見恍れてゐたが、不圖女が口元に笑つてゐるのを見て、

「何？」

「えゝ、唯。」

朋子の視線は前の男に注がれてゐた。昨宵から始めて女の顏を日影の下で見た。朋子は一寸羽織の袖を翳して、

「こんな色、全然私とは調和しないでせう。」

「なに、單色だから？」

「えゝ、何日かリボンのこの色が所好だと仰有つたでせう。だから態々これを着て出たんです。」

女の髪には、濃いお納戸色のリボンが差してある。男がそれに眼を遣ると、一寸右の手を上げて頭髪を抑へる眞似をした。

「あゝその手囊は――」

「これ？」と男の前へその手を突出して、「早く一對にして下さいな。」

要吉は衣囊から手袋を出して、片方の手に一本づゝ指を持つて穿めて遣つた。女は默つてさうされながら、だん〳〵男の腕へ凭れかゝるやうにした。何だかそんな事で男の心を繋がうとするものらしい。

やがて宇都宮へ着く。その時迄鼾の音を立てゝ眠つてゐた商人體の男は、急に眼を開いて、大革鞄を提げながら、あたふたと降りて行つた。少時窓の外に物賣の聲が騒々しい。

やがて汽笛が鳴つて、列車はがたりと動き出した。今度は二人の外に乘客もない。汽車は平野の中を駛つた。

何をしに行く。二人になると共に、一層嚴しくそれが男の心に迫つた。女を殺しに行く。最初自分が「貴方なら殺せる」と口走つた時、女は一番自分に接近して來たやうに見えた。あの時か

ら見ると、今は又ずつと離れて仕舞つた。終局に於て人間は矢張一人のものかも知れない。一人だ。が、一人だとすれば、この女とした約束を果すには、自分の女に求める力――愛の力に據る外はない。併し酬いられざる愛の力が、それ程力あるものであらうか。

で、それが駄目だとすれば、後は只一種のエキスペリメントとして、藝術の徒の好奇心に手頼るばかりだ。好奇心の犯罪――この上は只狂人になる外はない、飽迄自意識を失はぬ狂人になる外はない。

男は凝乎と女の横顔を見詰めた。赤い絲のやうなものが、一筋女の首を周つて連なるやうに見えた。女は堅く口を結んだまゝ物を言はない。一人で考へてゐる。自分が自分のことを考へてゐるやうに、彼女も自身のことを考へて居るのであらう。只默つてゐられるのが氣懸りで堪らない。

「二人は」と、男は思はず口に出した、「二人は別々の事を考へてゐるのだらうか。」

「え」と、女は何やら解らなさうな顔をしたが、急に男の手頸を掴んで振りながら、「別々ぢやない〳〵。」

「ふむ、別々では死ねない。」

二人は長い間無言をつゞけた。汽車は小さい停車場へ着く。

やがて又汽車の出るのを待つて、要吉は獨言のやうに言出した。「二人の何が――これが、普通の金に詰つたとか、添ふに添はれぬとか云ふやうな、さういふ原因で死にに出たのなら、こんな壓迫は感じまい。その方が何の位好いか知れないだらう。」

朋子は一寸男を見返したまゝ返辭をしなかつた。男もその儘口を噤んだ。

幾つも同じやうな小さい停車場がつゞく。新に田舍者らしい三人の客が乘込んだ、要吉はぼん

やりそんな人達の容子を眺めてゐたが、

「ねえ」と、女の方へ振向いて、「貴方は東北を旅行したことがあるか。」

「えゝ、一度平泉まで。」

「おや、衣川や高館の跡も見て來たんですね。」

女は膺揚に點頭いた。

夏草やつはものどもが夢の跡。要吉は目の前に死後の長い時間と廣い空間とを泛べて見た。で、何か言はうとした時、汽車が停車場へ着く。西那須野驛と聞いて、女を促して、遽てゝ客車を降りた。

うね〳〵と東北の野に向つて遠ざかり行く列車を見送りながら、二人は停車場を出た。別に行くべき處もない。車夫の親方らしいのが傍へ來て勸めるまゝに、人力車を二臺鹽原まで急がせた。

那須野は只ひろ〳〵と霜枯れた草野がつゞく。一面に灌木の木の葉が赤く枯れて、所々に蒼い松の葉が交つた。行手の雪を被つた山脈から吹卸す風は春のものとも思へぬ。

一筋の街道が枯野の中を眞直に走つた。上りだといふので、車夫は緩々と曳いて行く。固より何んな人を乘せて行くかは知る筈もない。薄い日影が女の肩を照してゐた。

原の眞中で、朋子は俄に人力車を停めさせた。

「何うかした？」と、後の人力車に乘つた要吉が訊く。

「いえ、只風が眼に泌みて痛いから。」

二臺の人力車は又駛り出した。山の麓に杉の樹立がある。この村迄來れば道の半ばだといふ。

少時そこで休憩んだ後、いよ〳〵坂道へ差懸つた。雨の降つた後で泥濘が多い。

山路は九十九折に紆つて、深い谷底には箒川の淺瀨も見え出した。湯の宿へ近つくに伴れて、山の氣が冷やかに、山蔭に雪が積つて、木の葉の落ちた枝が黑い網のやうに連なつた。車夫はくどくどと鹽原の名勝を說く。煩さいから默つてゐると、心得て更に言葉を繼ぐ。

日暮近く湯の宿に着いて、二階の新しい座敷に案内された。山國の朝夕寒く、大火鉢に炭火の靑い炎を上げるのが懷かしい。二人はその側へ寄つて坐つたが、酷く勞れたやうで、向ひ合つたまゝ物を言はない。一夜の合宿に知らぬ同志が泊り合せたら、こんなものかも知れない。

下婢が來て、「お風呂へ御案内しませう」といふ。山國の男が着るやうな袴を穿いてゐる。

要吉は默つて朋子を見返つた。女は頭振を掉つたので、

「後にするから」と、斷ると、

「それでは、直ぐ御膳を差上げます。」

白い圓盞の臺洋燈が持出された。二人はその下で夕餉の箸を上げた。

「私はこれ迄貴方の前で何度物を喰べたらう。あの時この時、殆ど數へられる。これからも何度喰べるか。」

朋子はたゞ下を向いてゐた。

やがて食事を終つた。長い廊下は寂として、客は二人の外にありとも覺えぬ。早くから雨戸を繰つたが、山嵐は絕えず扉を吹きまくつて、早瀨の音が耳につく。

「一寸その手紙を見せて下さい。」

「え、これ？」

女は包を開いて手紙の束を男に渡した。

「隨分ある」と、要吉は自分を冷笑ふやうに言つた。

「尤もチョールヂオは三年間に一人の女へ二百何本といふ手紙を書いた。」

「えゝ、でも私達はそれより烈しいことがあつた。一日に二本のことも。」

二人は洋燈の下に頭を寄せた。要吉はその中の一本を手當り任せに取つて中味を拔き出さうとしたが、偶と今見たら修辭的な誇大な文句ばかり並べて、死んだ人の墓銘を見るやうに、空虛な文字に代つてゐるやうな氣がしたので、手に持つたまゝやゝ躊躇した。

「何だか出して見るのが怖い。寧そ止めませうか。」

「お止めなさい」と、女は引たくるやうに取上げた。

そこへ宿の主人が出て、茶代の禮を述べてから、宿帳を出して引退つた。要吉はそれを取上げて、有體に二人の住所姓名を記けた。

朋子も傍から見てゐたが、につと笑つたまゝ、何とも言はなかつた。又自分一人の中へ引込んで、相手の男のことも忘れたやうに見えた。要吉は少時それを見守つてゐた。何も言ふことがない。强ひて言へば、この場に應はしくない聯想を招くのが心苦しい。

「湯へ入らうか」と、やがて男が堪へ兼ねたやうに口を開く。女はたゞ頭振を掉つた。

「汽車の煙にも吹かれたから、一寸汗を流して置いた方が可い。」

「お留守番をしてますから、先づ行つてらして。」

「ぢや、後からね」と、男は立上つた。

「えゝ、淸冽な湯だつたら」と、追掛けるやうに言ふ。

それを聞捨てたまゝ、手拭を下げて湯殿へ降りる。板の間に着物を脱いで、浴槽の中に立つた。槽は木の臭ひのする程新しい。湯は絶えず樋を傳つて流れて來て、槽の縁を越して落ちて行く。天井の下に立罩めた湯氣は夜深の寒さに凝つて、一しほ息苦しい。

要吉は片肘を槽の縁に託したまゝ、柱に掛けた洋燈の火影を見詰めてゐた。濃い湯氣の玉がその前をぐる〳〵と廻つて、月暈のやうな輪をゑがく。眼を離さないで、凝乎とそれを眺めてゐると、だん〳〵燈火の光が遠くなつて行く。かうして幾重にも白い湯氣に包まれて、その奥に閉籠められたまゝ、自分は二たび歸らないのであらうか。だん〳〵氣も遠くなつて、樋を落ちる湯の音だけが、山の猪が來て水を飲むやうに、ぺちや〳〵と聞えてゐる。只、それだけでこの世に繋がれてゐるやうだ。このまゝ、水の上に泛んだまゝ、二たび眼を開かなかつたら——二たび二階に殘した女を見なかつたら——

不意に湯殿の戸の開く音がして、われに返つた。誰やら這入つて來たらしい。恰度洋燈の下に立つてゐるので、男とも女とも見分け難い。何か物を言つたらしいが、好くは聽取れなかつた。間もなく、板仕切りを距てた女湯の方から、ひそやかに湯を使ふ音が聞えて來た。

要吉は匆卒に濡れた身體を拭いて風呂場を出た。薄暗い廊下傳ひに、裏梯子から二階へ上つた。何の部屋も灯火が點いてゐない。

座敷へ戻つて見ると、有明を一つ點火して、二つとも寢床が延べてあつた。何處へ行つたのやら、朋子の姿は見えない、要吉はひとり火鉢の前に坐つて待つてゐた。

やがて女も湯から上つて來た。髪を洗つたと見えて、ちゞれ毛が肩に波を打つてゐた。その足で衣桁に濡手拭を掛けて來たが、眞中へ鏡臺を持出して、その前に坐つた。油氣のない髪だから

直に束ねようとするらしい。要吉は只その女らしい手附を眺めてゐた。あの長い髪をあの細い頸に卷附けて、力任せに引いたら——ふら〳〵と、そんな心持にもなつた。恰度女は彼方を向いてゐる。何だか腕の力が抜けたやうな氣がして、纔に擡げた腰を卸した。今自分が何をしてゐるか、それを知つてゐて人殺しが出來ようか。無意識になる外はない、一瞬の誘惑に驅られる外はない。自分の力で、自由意志を以て、人間が人間を殺せるものか。殺すものは——何か知らぬ——自分以外の或物だ。或物の道具とならなけりや殺せるものではない。

「ね、髪を束ねないで、その儘で居て下さい。」男が急に聲を掛けた。

「え」と、朋子は振返つた。

「髪を垂れた方が美しい。」

女はつと立上つて男の側へ來た。男は女の背へ手を廻して抱へた。指が濡れた髪の毛の中へ這入る。不圖それが血汐のぬめりのやうな氣がした。その時女は男の腕に身を委ねたまゝ、そつと懷の短刀を出して、男の手に握らせた。有明の灯に透して見ると、黑鞘の短い懷劍である。

「早く、早くして。」

男はそれを握つたまゝ、思はずたじ〳〵となつた。この儘では——この儘では何うすることも出來ない。

「ねえ、貴方は」と、水に溺れる人のやうに、女の手を摑みながら、「貴方は私のために死に、私は貴方のために死ぬ。さう言つて下さい。私を愛すると、唯一言。」

その一言で自分は拯はれるのだ。我を忘れることも出來る。そしたら——けれども、女は只默つてゐる。

「言へない、え、言へない？」

「その時迄、その時迄言へない。」

要吉は女を引起して、凝乎とその顔を見入つた。女はその眼を避けるやうに、彼方此方自分の顔を持扱ひながら、つと男の膝に突伏して泣く。涙は着物を透して煮えるやうに熱い。

男は女を抱へたまゝ、何とも言はれない苦悶を經驗した。何故言へない、何故その一言がこの女には——が、言へぬものなら仕方がない。今更何と言つた所で、それが何なるものか。女は一直線に思ひ込んでゐる。それに自分は——自分は生溫い水だ、熱くもなければ冷たくもない、甚督の口から吐出されるやうな生溫い水だ。一種の實驗として、人殺しの出來るやうな超人でもなければ、又われを忘れて狂暴を敢てするやうな狂人でもない。矢張自分には人間以上の力はなかつた。そんな物があるやうに思つたのは、眞個一時の妄想に過ぎない。あゝ、自分は一生の危機に臨んで居る。何と言つた所で、自分はこの女を失ふ外ないかも知れない。この女を失ふばかりでなく、自分といふものの靈魂をも——

かくて夜の白むまで、二人はこの姿勢の儘動かなかつた。それは人間の一生のやうに長たらしい、又人間の一生の樣に短い夜であつた。

二人は又次の日の光を見た。

有明の丁字が落ちて、ぽつと薄白い炎を上げたが、その儘夢のやうに消えた。火皿に油が盡きたのだらう。何處かで雨戸を繰る音が聞える。

女は男の腕に顔を伏せたまゝ、息があるものと思へない。要吉はそつと身體を搖振つてゐた。

「ね、又夜が明けた。」

女は動かない。

「今頃御宅ぢや——阿母樣には何んな夜が明けたらう。」

「そんな、そんな事を言ひ出しちや厭だ。」

女は男の口を閉ぐやうにして、泣く。

「實はね」と、要吉は女の脊に手を掛けたまゝ、「夜が明けたらお宅へ電報を打つて、迎への人に來て貰はうと思つてゐた。その人達に貴方を渡して置いて、私は——矢張北を向いて、山越えに行ける所まで行かうと決心した。」

「そんな事をされちや耐らない」と、女は頭を上げて、手當り任せに獅嚙みつく。

「その外に仕樣ない」と投出すやうに言つた。「私は思ひ違ひをしてゐた。死ぬ時は、互に手を取つて、めそ〳〵泣き合つて、溶けて行くやうな心持にならなきや死ねない。私のために泣いて吳れる相手でなきや手は下せない。」

何か言ふだらうと思つて待つてゐたが、女は突伏したまゝ返辭をせぬ。又じろ〳〵女の耳の後ろを見守りながら、

「貴方は未だ私に對して敵意を持つてるんだ。」

「敵意？」と、聲の下に呟く。

「敵意さ。昔から打解けたことのない——兩性間の舊い怨恨」と、ぽつり〳〵言つたが、「敵同士ぢや一緒には死ねない。」

「さうぢやない。そんな事は十九日から解つてゐて吳れた筈だ——あの手紙を讀んで吳れたら。」

「それぢや何故——」と、男は思はず腰を立てた。

不意に襖を開けて、下女が行明を下げに來た。二人はつと座を開いたが、顏を見合せたまゝ、少時物を言はなかつた。

やがて女は想出したやうに、男の手を執つて搖振りながら、

「私は行く、先生の行らつしやる所まで行く。」

「樺太迄も？」と、男は女の顏を見返した。

「何處へでも。」

「死ぬ處まで。」

女は笑顏を見せて點頭く。

要吉は何やら考へてゐたが、「ねえ、お宅では田端停車場に氣が附きはすまいか。」

女も一寸考へて見て、

「參ります、屹度參ります。」

「それぢや、あの晩の終列車で、二人が西那須野驛までの切符を買つて乘込んだことは、直に知れるわけだ。」

朋子も不安らしい容子をして聞いてゐたが、「早く立ちませう、早く。」

「さう、猶豫してはゐられない。」

二人は立上つた。折柄戸を繰りに來た宿の男を急き立てゝ、あたふたと出立の用意をした。

三十四

朝飯の給仕に出た下婢に、それとなく樣子を聞くと、この奥の道は尾花峠と云つて、會津へつゞく街道、冬の間は雪が丈餘も積つて、月を越さなければ人は通れないといふ。

二人は近邊を見物すると言ひ置いて、宿を出た。上の鹽原迄は、昨日の人力車に乘せられて行く。山の中の寂惚けたやうな町であつた。昔風な湯の宿が何軒も並んでゐる前を、がら〳〵と町外れ迄曳いて行つたが、後の車夫は急に振返つて車上の人を見上げながら、

「もし、旦那何方へ着けませうか」要吉は夢から覺めたやうに四邊を見廻した。「うむ、もう可いんだ。此處で卸して吳れ。」

「でも、何方かお宿を——」

「うむ、可いんだ。この邊を散歩してから勝手に宿を取るから、もう歸つても可いんだよ。」

「さうですか」と、車夫はしぶ〳〵棒を卸した。

町の出外れに、壞れかゝつた木の橋がある。二人は橋の袂に立つて、空車が歸つて行くのを見送つてゐたが、その影が見えなくなると、遽てゝ橋を渡つた。又北へ向つて行く。

麓の村迄は三里だといふ。二人は落人のやうに道を急いだ。街道は箒川の上流に添うて糸のやうに續く。早瀨の水の澱む邊りに、二人の男が岩の上に踞がんで、禪定に入れる人のやうに默々として絲を垂れてゐた。十二三の女の子が、背中に赤ン坊を結ひ附けながら、弟の手を引いて來た。二人とも裁附けを穿いてゐる。その外には滅多に人にも出逢はない。

空が晴れて、雪の積つた山の嶺が白くくつきりと際立つて見えた。あの山越して行くのである。朋子は袂を上げて、額に滲む汗を拭いた。山から吹いて來る風は冷たいが、日はぽか〳〵と暖かい。

谷合の平原はだん〳〵迫つて、やがて麓の小村へ着く。村外れの一軒家で、簷に草鞋を吊して

障子に煙草の葉の描いてある家を見附けて、要吉は女をかへり見ながら、つと閾を跨いた。つゞいて女も這入つて來た。その後から直に障子を閉て切つた。

「一寸休ませて貰ひますよ」と、緣鼻に腰を掛けたが、誰も應ずるものがない。家の中はがらんとして居る。

不圖圍爐裡の側に蹲まつてゐる爺さんに目を附けて、も一度聲を掛けて見た。

「ねえ、一寸休ませて貰ひましたよ。」

「えゝッ」と、爺さんは頓狂な顏を上げた。眼の緣が赤く爛れてゐる。

「これは／＼、お出でなされや」と言ひながら、急須の茶を煎れて、二人の傍へ持つて來た。

「何うでせう、峠は未だ雪が深いでせうね」と、要吉は爺さんに眼を附けながら訊いた。

爺さんは耳が遠いらしい。要吉は聲を大きくしても一度訊いて見た。

「あゝ、峠か」と、爺さんはきよとんとして、「峠の開くのは、さうぢや、月を越して十日も經つてからなう」と言ひながら、二たび圍爐裡の側へ戻つた。

その儘うつら／＼としてゐたが、又急に眼を開いて、

「さうぢや。一昨日もな、一人旅商人のやうな若衆が峠を越すと云うてぢやで、俺が强つて留めたが、無理に振切つて出掛けたぢや。あれも無理に越せりや可えがと、案じてゐるのぢやわい。」

「でも、戻つて來なけりや無事に越したのでせう。」

要吉は口を挿んだ。が、爺さんは矢張聞えないらしい。

「裏山が難所でな」と、獨言のやうにつゞけた「上り一里に下り三里、三里の下りが難所でな。それに午前ぢやと未だ可えが、これから日が下りかけると、雪の下が緩んでな。裏山の雪崩れ、

此奴が怖ろしいぢや。」

要吉は朋子と顏を見合せて點頭き合つた。雪崩れの下に葬られる——自然の手に身を委ねるほど容易いものはあるまい。自然の前に人間の意志はない、不和も憎惡もない。凡てを混沌の裡に葬ることが出來る、暗黑の裡に——あゝ未だ此處に最後の手段が殘つてゐた！

二人は少時思ひ／＼の考へに耽つてゐたが、やがて一人が、

「立ちませう」と言出した。

一人も直に立つた。

要吉は幾許かの茶代を下に置いて、

「爺さん、何うもお邪魔でした」と聲を掛けた。

爺さんは眠つてゐるのか返辭をしない。その儘、其處を出ることにした。

二人は又目の前に山を見て急いだ。村を拔けて板橋を渡れば、直に山路へかゝる。本道は未だ人が通らない。炭燒小屋の在る處まで、拔路の方が却て道が開いてゐると聞くまゝ、山の麓から右へ折れて、谷川に隨いて登る。山は淺いが、鳥も啼かぬ。雪の下行く谷水に添うて、炭燒の通路は枯木の中を縫うて走つた。

水の中の石を傳つて、背負梯子に炭俵を背負つた男が、むづ／＼と谷川を渡つて來た。二人は此方の岸に立つて待つてゐたが、その男は通りすがりに、被つた手拭を取つて、

「御免なされや」と挨拶した。

「炭燒小屋まで、道程は何の位かな」と訊く。

「さやうさ、もう五六町もあらうかな。つい其處ぢやいな」と言ひ捨てゝ、又のそ／＼と行く。

不圖、女のリボンが水に落ちた。くる〳〵と渦を卷いて、見る間に下の巖蔭へ隱れた。女はそれとも心附かない。

二人は又雪を踏んで登つた。谷間の行詰つた處に、二つ三つ炭燒小屋が見え出した。その前迄辿り着いて、小屋の中を覗き込むやうにした。土の中へ圍爐裡を切つて、自在鍵に煤びた茶釜も懸けてある。燃えさしの榾の灰が白い。

要吉は入口に立つて、二三度聲を掛けた。

「おゝ」と小屋の裏から炭燒の女房が出て來た。

「湯が一杯無心したい。」

「湯かいな」と、女房は無愛想な返辭をしながら、茶釜の湯を汲んで出した。

二人は小屋の前の丸太に腰を掛けた。樹の間を洩れる日影がちら〳〵して、茶碗に罅は入つても中の水は美しい。

上の岨路から、五つ許りの女の兒が素足に藁沓を穿いて、よち〳〵降りて來たが、二人の前に立停つた。時々涕汁を啜り上げながら、目瞬きもしないで、代る〳〵二人の顏を見上げてゐる。

朋子もにつこりして、「何か遣りませうか。」

「さう。」

「でも、何にもありませんのね。」

「お錢でも可いでせう。」

女は蟇口から銀貨を出して、子供に持たせようとした。

「お出で〳〵、これを上げるから。」

子供は手を出さぬ。立上つて、側へ行かうとすると、わつと泣き出した。

「何を泣くんだよ、これを遣るとぢやに。」

さう言ひ〳〵、小屋の中から女房が駈け出して來て、遽てゝ子供の代りに受取つた。この女房が取上げて、汗臭い巾着にきり〳〵卷いて、何時迄も所藏つて置くらしい。要吉は息苦しいやうな氣持がした。

日も傾かう。二人はやがて其處を立つた。本道へ出る路だと教へられたまゝ、小屋の裏から坂を登りかけたが、勾配の急な上に、未だ人の通つた跡もない。三町とは行かぬ間に、路が雪に埋もれて、何方へつゞくとも分らなくなつた。少時途方に暮れて立つてゐたが、丁々と斧を揮ふ音が谺に響いて、谷の向ひの雪の上に木を伐る黑い男が見えた。

「おうい」と呼べば、やゝあつて、

「おゝ」と應へる。

本道へ出る路はと訊いたが、向うで何を言ふのか解らない。唯、左の方を指さすやうに見えたので、木の枝に縋つて、無闇に山の腹を攀登つた。幾度か足場を失つて轉げ落ちさうにしたが、漸と小山の背へ出た。本道は山の背を蜿つてつゞく。

二人はしばらく雪の中に倒れてゐた。又起直つて歩み始めた。路の上は雪が平なので、道には迷はないが、一足毎に膝の上まで踏み込む。女はその足跡を辿つて隨いて來た。一町に休み、百歩に休んだ。休むたんびにウイスキイを仰いで、僅に息を繼ぐ。

山の腹を周るとて、幾度も上から土砂を落して來るのに出逢つた。雪崩れの跡と見えて、路が半ば崩れたまゝ、谷間へ落込んだ所も二三箇所あつた。

到頭道は絶壁に消えた。要吉は手に持つた外套を雪の上に敷いて、その上に女を座らせて置いて、懸崖の縁を傳ひながら、半町餘り先迄路を求めに行つた。岩角に手を添へて瞰下せば、數十丈の深い谿底に枯木の林が見えて、皷を打つやうな水音が微かに聞えた。

彼方此方見廻したが、迚も路が續いてゐさうにもない。又崖傳ひに戻つて來た。

男の姿を見ると、朋子は立上つて二三歩近づく。男は頸を振つて留めた。二人は又元の所へ戻つて、外套の上へ倒れるやうに坐つたが、少時言葉がない。

やゝあつて、

「勞れたの」と、男が訊く。

「いゝえ、先生こそ。」

女の顏には、明々と疲勞の色が現はれてゐた。それがために、一際誘惑の力を加へて、別人のやうにも見える。男は女を見詰めた。家を出てから、未だ女の唇に觸れない。

二人は長い接吻を交はした。

やがて、つと離れて、互に顏を見合せたが、又犇と唇を合せた。

空にはいやな雲が湧いて、おひ〳〵日影も薄くなつた。暮れるに間もあるまい。

二人は又よろ〳〵と立上つた。一町ばかり後へ戻ると、土砂交りの雪に埋まつてよくは見分けられぬが、路は左へ折れて、坂の上へ續くやうにも見える。とかくして坂を登つた。山巓迄雪に蔽はれて、一木を留めぬ草山の腹を路らしいものが蜿蜒とつづく。

日が落ちてから、急に肌寒うなつた。口の中は乾燥ぎ切つて、足を持上げるだけの力もない。十歩に休み、五歩に息を繼ぐ。朋子は一歩も後れないで、男の後から隨いて來た。何だかそれが

自分の意志を支配する魔性のものの樣に思はれて忌々しい。

路傍に一本取殘されたやうな白樺が立つてゐる。兎に角その下迄辿り着かうとして、男は泳ぐやうにして前へ出たが、兩足とも一時に雪の中へ踏込んだ。その儘ぐら〳〵と眼が眩む。

「あゝ、ウイスキイを――」

女は前へ廻つて、掌から男の口に啣ませた。要吉はしばらく横に倒れたまゝ物を言はない。

「何んなです、お心持は。」

男は窶れた顏に笑つて見せて、

「もう好い。唯、動きたくない。」

雪の山は寂として暮れて行く。

二人は默つて、黑い夜の色の襲ひ來るさまを眺めてゐた。

「手紙を燒きませう」と、女は意を決したやうな聲音で言つた。男の顏を覗き込んで、「もう可いですね、ね。」

要吉も點頭いた。

女は包を解いて、手紙の束を雪の上へ投出した。その上へウイスキイの殘りを注ぐ。男は踞がんで燃寸を擦つた。小さな青い火がぼゞと燃えて、その儘すうと煙を出して消えた。二たび擦る。燐寸が半ばから折れた。三たび、四度目に燃え上つた。男の戀を連れた文字が燃える。黑く燻つて消えようとしては、又ぶす〳〵と燃え上つた。

要吉はそれを見詰めてゐた。眼も離さず見詰めてゐた。いよ〳〵黑い灰となつて仕舞つたのを見濟まして、不圖女をかへり見たが、自分の顏に泛んだ失望の色が自分の眼にも見えるやうな氣

がした。

俄に山巓からどつと風が落ちて來た。灰を飛ばし、雪の粉を飛ばし、われも人も吹飛ばして仕舞ひさうな。二人は犇と相抱いた。風は山を鳴らして吹きに吹く。

「死んだら何うなるか、言つて、／＼。」

女は男の腕を摑んで、嗄れた聲に叫ぶ。

「言つて、／＼。」

「私には――言へない。」

女は凝乎と男の顏を見守つてゐる。それを見ると、男の心には又むら／＼と反抗心が起つた。生きるんだ、／＼、自分は何處迄も生きるんだ。

つと內衣囊から短刀を取出して、それを握つたまゝ立上つた。女はその氣色を見て、

「何うするんです」と、突走るやうに訊く。

あなやと言ふ間もなく、要吉は谷間を見蒐けて短刀を投げた。

「私は生きるんだ。自然が殺せば知らぬこと、私はもう自分ぢや死なない。貴方も殺さない。」

二人は顏を見合せたまゝ聲を呑んだ。天上の風に吹き散らされて、雲間の星も右往左往に亂れて見えた。女は又叫ぶ。

「歩きませう、もつと歩きませう。」

「うむ、歩きませう。」

二人は雪明りをたよりにして、風の中を行く。風のために雪が氷り始めたやうだ。只、その上脣を破れば、底迄踏み込まずには置かない。やつと半丁程進んだ時、ばたりと背後で倒れる音が

した。朋子は崖を踏み外したまゝ、聲を立てずにゐる。遽てゝ、それを引上げようとして、一緒にずる／＼と摺り落ちた。三間ばかり落ちて行つたが、危く雪の洞に引かゝつた。

二人は折重なつたまゝ動かなかつた。だん／＼風の音も遠くなるらしい。要吉は腰の邊りから冷たい水が泌み込んで來るのを覺えながら、ついうと／＼とした。その後は何うなつたか知らない。

不圖、誰かに喚び起されるやうな氣がして眼を開いた。朋子が凝乎と自分の顏を見守つてゐる。「ね、歩きませう、もつと歩きませう。」

女は急に男の手を持つて、同じ事を繰返した。

要吉は默つて立上つた。見返れば、月天心に懸つて、遠方の山々は宛ら太洋の濤がその儘氷つたやうに見えた。わが居る山も、一面に雪が氷つて、きら／＼と水晶のやうな光を放つた。あゝ氷獄！　氷獄！　女の夢は終に成就した。到頭自分は女に伴れられて氷獄の裡へ來た。――男の心には言ふべからざる歡喜の情が湧いた。最う可い、もう可い！　二人は手を取合つたまゝ、雪の上に坐つてゐた。何にも言ふことはない！

二人は又立上つた。堅く氷つた雪を踏みしだきながら、山を登つて行く。

山巓も間近になつた。

だん／＼月の光がぼんやりして、朝の光に變つて行く。

――了――

昭和七年二月十一日印刷
昭和七年二月十五日發行

岩波文庫
791-792

煙草★★
定價四十錢

著者　森田草平

發行者　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　君島潔

共同印刷株式會社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波書店
電話九段一八七・一八八〇番
一〇二二〇小賣部專用番
振替口座東京二六二四〇番

讀書子に寄す

――岩波文庫發刊に際して――

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の譯譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を強ふるが如き、果して其揭言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を採したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

新訓萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★★
新訓萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★★
自文萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★★★
自文萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★★
古事記 幸田成友校訂 ★
訓譯日本書紀 上卷 黑板勝美編 ★
訓譯日本書紀 中卷 黑板勝美編 ★★★
古語拾遺 加藤玄智校訂 ★
水鏡 和田英松校訂 ★
大鏡 和田英松校訂 ★★
增鏡 和田英松校訂 ★★
三條西家本 榮花物語 三條西公正校訂 ★★
參考 伊勢物語 屋代弘賢校訂 ★
竹取物語 並附錄 島津久基校訂 ★
平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ★★
平家物語 下卷 山田孝雄校訂 ★★
源氏物語 (一) 島津久基校訂 ★★
源氏物語 (二) 島津久基校訂 ★★
源氏物語 (三) 島津久基校訂 ★★
土佐日記 池田龜鑑校訂 ★
紫式部日記 池田龜鑑校訂 ★
更級日記 西下經一校訂 ★
枕草子(春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂 ★★
枕草子(春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂 ★★
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 ★
古今和歌集 尾上八郎校訂 ★★
新撰 山家集 佐佐木信綱校訂 ★★
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ★★
新訂 金槐和歌集 齋藤茂吉校訂 ★★
藤原定家歌貞家集(年號) 佐佐木信綱校訂 ★★
法華義疏 上卷 聖德太子御製 花山信勝校譯 ★★
正法眼藏隨聞記 懷奘編 和辻哲郎校訂 ★
日蓮上人文抄 姉崎正治校注 ★★
歎異抄 金子大榮校訂 ★
徒然草 西尾實校訂 ★
方丈記 山田孝雄校訂 ★
花傳書 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
申樂談義 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
能作書・覺書條條 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
至花道書 ★
入木道三部集 (貞本朝能書傳) 岡麓校訂 ★
奥の細道その他 芭蕉作 伊藤松宇校訂 ★
芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 ★★★
芭蕉連句集 小宮豐隆編 ★★★
燕村七部集 伊藤松宇校訂 ★★
風俗文選 伊藤松宇校訂 ★★
鶉衣 石田元季校訂 ★★
おらが春・我春集 一茶作 荻原井泉水校訂 ★
俳風柳多留 上卷 西原柳雨校訂 ★★

風講 柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ★★
風講 柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ★★
萬載狂歌集 野崎左文校訂 ★
德和歌後萬載集 野崎左文校訂 ★
松の葉 藤田德太郎校註 ★
松の落葉 藤田德太郎校註 ★★
閑吟集 狂言小歌集 附室町小歌拾遺集 藤田德太郎校註 ★
好色一代男 西鶴 和田萬吉校訂 作 ★
好色一代女 西鶴 和田萬吉校訂 作 ★
好色五人女 西鶴 和田萬吉校訂 作 ★
日本永代藏 西鶴 和田萬吉校訂 作 ★
世間胸算用 西鶴 和田萬吉校訂 作 ★
西鶴織留 西鶴 和田萬吉校訂 作 ★
武家義理物語 西鶴 和田萬吉校訂 作 ★
椿說弓張月 上卷 曲亭馬琴 和田萬吉校訂 作 ★★
椿說弓張月 中卷 曲亭馬琴 和田萬吉校訂 作 ★★
椿說弓張月 下卷 曲亭馬琴 和田萬吉校訂 作 ★★
國性爺合戰 近松門左衛門 和田萬吉校訂 作 ★
鎧の櫃三重雛 近松門左衛門 和田萬吉校訂 作 ★
曾我會稽山心中天の網島 近松門左衛門 和田萬吉校訂 作 ★
胡蝶物語 曲亭馬琴 和田萬吉校訂 作 ★★
浮世風呂 式亭三馬 和田萬吉校訂 作 ★
浮世床 式亭三馬 和田萬吉校訂 作 ★
東海道膝栗毛 十返舍一九 和田萬吉校訂 作 ★★
加賀鳶 河竹黙阿彌 校訂 作 ★
赤垣源藏・仲光 河竹黙阿彌 校訂 作 ★
忍ぶの惣屋 新助 太 河竹黙阿彌 校訂 作 ★★
孝子善吉 河竹黙阿彌 校訂 作 ★
鼠小僧實錄先代萩 河竹黙阿彌 校訂 作 ★★
こゝろ 夏目漱石 著 ★★
道草 夏目漱石 著 ★★
行人 夏目漱石 著 ★★
漾虛集 夏目漱石 著 ★★
草枕 夏目漱石 著 ★
坊つちやん 夏目漱石 著 ★
五重塔 幸田露伴 著 ★
風流佛・一口劍 幸田露伴 著 ★
二人女房 尾崎紅葉 著 ★
觀音岩 前篇 川上眉山 著 ★★
觀音岩 後篇 川上眉山 著 ★★
にごりえ・たけくらべ・ゝ 樋口一葉 著 ★
うたかたの記(他三篇) 森鷗外 著 ★
新曲浦島・新曲赫映姫 巖本善治 編 ★
運命論者 他二篇 國木田獨歩 著 ★
源をぢ 他二篇 國木田獨歩 著 ★
號外 他六篇 國木田獨歩 著 ★
櫻の實の熟する時 島崎藤村 著 ★★

小說・戲曲・詩歌・隨筆・評論

千曲川のスケッチ 島崎藤村 著 ★
幸福者 武者小路實篤 著 ★★
蒲團・一兵卒 田山花袋 著 ★
田舍教師 田山花袋 著 ★★
小僧の神樣 他十篇 志賀直哉 著 ★★
和解・或る男の死 其姉 志賀直哉 著 ★★
陸奥直次郎長興善郎 著 ★
青銅の基督 長興善郎 著 ★
偸盜 芥川龍之介 著 ★
厭世家の誕生日 (他六篇) 佐藤春夫 著 ★★
入江のほとり 正宗白鳥 著 ★
生まざりしならば 正宗白鳥 著 ★
大石良雄 野上彌生子 著 ★
海神丸 野上彌生子 著 ★
出家とその弟子 倉田百三 著 ★★
布施太子の入山 倉田百三 著 ★
その妹 武者小路實篤 著 ★
人間萬歲 武者小路實篤 著 ★
波 山本有三 著 ★★
病牀六尺 正岡子規 著 ★★
靈汁一滴 正岡子規 著 ★★
仰臥漫錄 正岡子規 著 ★★
子規歌集 正岡子規 著 ★
左千夫歌論抄 齋藤茂吉 土屋文明 編 ★★
左千夫歌集 齋藤茂吉 選 ★
上田敏詩抄 茅野蕭々 編 ★★
晚翠詩抄 土井晚翠 著 ★★
藤村詩抄 島崎藤村 自選 ★★
有明詩抄 蒲原有明 著 ★★
泣菫詩抄 薄田泣菫 著 ★★
逍遙遺稿 笹川臨風 金築松桂 譯 ★★
歌舞音樂略史 小中村清矩 著 ★★
俗樂旋律考 上原六四郎 著 ★
蘭學事始 杉田元白 著 野上豐一郎 校訂 ★
茶の本 岡倉覺三 著 村岡博 譯 ★
綱島梁川集 安倍能成 編 ★★
清澤文集 清澤滿之 著 ★★
福澤撰集 福澤諭吉 著 ★★
北村透谷集 島崎藤村 編 ★★
海舟座談 巖本善治 編 ★★

外國文學(小說・戲曲・詩)

杜詩 卷之一 漆山又四郎 譯註 ★★
杜詩 卷之二 漆山又四郎 譯註 ★★
杜詩 卷之三 漆山又四郎 譯註 ★★
杜詩 卷之四 漆山又四郎 譯註 ★★
陶淵明集 漆山又四郎 譯註 ★★
唐詩選 上卷 漆山又四郎 譯註 ★★
唐詩選(附作者略傳) 下卷 漆山又四郎 譯註 ★★
即興詩人 上卷 森鷗外 譯 ★★
即興詩人 下卷 森鷗外 譯 ★★
プランド 角田イプセン 俊譯 ★★

幽霊　ストリントベルク作　小宮豐隆譯★
稲妻　ストリントベルク作　小宮豐隆譯★
父　ストリントベルク作　小宮豐隆譯★
令嬢ユリ　ストリントベルク作　茅野蕭々譯★
オネーギン　プーシュキン作　米川正夫譯★★
イワーン・イワーノヴィッチ　イワーン・ニキーフォロヴィッチとが喧嘩をした話　ゴーゴリ作　原久一郎譯★
檢察官　ゴーゴリ作　米川正夫譯★★
現代のヒーロー　レールモントフ作　中村白葉譯★★
皇帝フョードル　アレクセイ・トルストイ作　除村吉太郎譯★
ブウニンとパブリン　トゥルゲニエフ作　小沼達譯★
罪と罰第一卷　ドストエフスキイ作　中村白葉譯★★
罪と罰第二卷　ドストエフスキイ作　中村白葉譯★★
罪と罰第三卷　ドストエフスキイ作　中村白葉譯★★
カラマーゾフの兄弟　ドストエフスキイ作　米川正夫譯★★★
カラマーゾフの兄弟　第一卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯★★★
カラマーゾフの兄弟　第二卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯★★★
カラマーゾフの兄弟　第三卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯★★★
カラマーゾフの兄弟　第四卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯★★★
貧しき人々　ドストエフスキイ作　原久一郎譯★★
戰爭と平和　第一卷　トルストイ作　米川正夫譯★★★
戰爭と平和　第二卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第三卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第四卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第下卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第上卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第下卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第上卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第下卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第四卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
戰爭と平和　第下卷　トルストイ作　米川正夫譯★★
イヴァン・イリッチの死　トルストイ作　米川正夫譯★
結婚の幸福　トルストイ作　米川正夫譯★
光あるうちに光の中を歩め　トルストイ作　米川正夫譯★
クロイツェル・ソナタ　トルストイ作　米川正夫譯★
復活　上卷　トルストイ作　中村白葉譯★★★
復活　中卷　トルストイ作　中村白葉譯★★
復活　下卷　トルストイ作　中村白葉譯★★
闇の力　トルストイ作　米川正夫譯★
生ける屍　トルストイ作　米川正夫譯★
櫻の園　チエーホフ作　米川正夫譯★
伯父ワーニャ　チエーホフ作　米川正夫譯★
サーニン　上卷　アルツイバーシェフ作　中村白葉譯★★
サーニン　下卷　アルツイバーシェフ作　中村白葉譯★★
賢者ナーターン　レッシング作　大庭米治郎譯★★
ギルヘルム・マイスター　上卷　ゲーテ作　林久男譯★★★
ギルヘルム・マイスター　下卷　ゲーテ作　林久男譯★★★
ファウスト　第一部　森鷗外譯★★★
ファウスト　第二部　森鷗外譯★★★
ヴレンシュタイン　シルレル作　鈴木貞一譯★★
若いエルテルの惱み　ゲヨエテ作　茅野蕭々譯★★
ヴィルヘルム・テル　シラー作　櫻井政隆譯★★
全グリム童話集　第一卷　金田鬼一譯★★
全グリム童話集　第二卷　金田鬼一譯★★
全グリム童話集　第三卷　金田鬼一譯★★
全グリム童話集　第四卷　金田鬼一譯★★
全グリム童話集　第五卷　金田鬼一譯★★
全グリム童話集　第六卷　金田鬼一譯★★
全グリム童話集　第七卷　金田鬼一譯★★
ゲエテの對話抄　エツケルマン著　鹽屋英四郎譯★★
春の日ざめ　ヴェデキント作　野上豐一郎譯★
埋木　キリシュネル作　森鷗外譯★
トオマス・マン短篇集1　實吉捷郎譯★
トオマス・マン短篇集2　實吉捷郎譯★
祖母　グリルパルツエル作　岡本修助譯★
みれん　シュニツツラ作　森鷗外譯★★
アナトール　シュニツツラ作　小宮豐隆譯★★
青い鳥　メーテルリンク作　若月紫園譯★★
ポリウクト　コルネイユ作　木村太郎譯★
人間嫌ひ　モリエール作　關口存男譯★
マノン・レスコオ　アベ・プレヴォオ作　河盛好藏譯★★
從兄ボンス　上卷　バルザック作　水野亮譯★★
從兄ボンス　下卷　バルザック作　水野亮譯★★
知られざる傑作（他五篇）　バルザック作　水野亮譯★
カルメン　メリメ作　杉捷夫譯★
コロンバ　メリメ作　杉捷夫譯★★
エトルリアの壺（外五篇）　メリメ作　杉捷夫譯★
日の出前　ハウプトマン作　板本忠夫譯★★
希臘の春　ハウプトマン作　城田嗜一譯★
ソアーナの異教徒　ハウプトマン作　奥津彥重譯★★
水の上　モーパッサン作　吉江喬松譯★★
ピエルとジャン　モーパッサン作　前田晃譯★★
生の誘惑（原名イヴ）　モーパッサン作　前田晃譯★
お菊さん　ピエル・ロチ作　野上豐一郎譯★★
氷島の漁夫　ピエル・ロチ作　吉江喬松譯★★
若き日の手紙　フイリップ作　外山槍夫譯★★
愛と死との戯れ　リマン・ロラン作　岸山敏彥譯★
法王廳の拔穴　アンドレ・ジッド作　石川淳譯★★
クオレ　愛の學校　上卷　アミーチス著　前田晃譯★★
クオレ　愛の學校　下卷　アミーチス著　前田晃譯★★
恐ろしき媒　ホセ・エチガライ作　永田寛定譯★★
ブレイク抒情詩抄　壽岳文章譯★
小公子　バアネット著　若松賤子譯★★
人と超人　シヨウ作　市川又彥譯★★
鰐夫の家　シヨウ作　市川又彥譯★
思想の達し得る限り（原名メトセラ時代に歸れ）　シヨウ作　相良德三譯★★
緋文字　ホーソン作　佐藤清譯★★

哲學・自然科學・文學・宗教・教育

ブラソクラテスの辯明　プラトン　久保勉譯★
プロタゴラス　プラトン　朝池慧一郎譯★
純粹理性批判　上卷　カント　天野貞祐譯★★★
實踐理性批判　カント　波多野精一　宮本和吉譯★★
プロレゴーメナ　カント　桑木嚴翼　天野貞祐譯★
哲學體系　スピノーザ　小尾範治譯★★★
知性改善論　スピノーザ　畠中尚志譯★
哲學とは何か　イマヌエル・カント　河東涓譯★
歷史と自然科學・道德の原理に就て　ヴィンデルバンド著　篠田英雄譯★

認識の對象 リツケルト著 山内得立譯 ★★
作り上げた利害 ベトベンテ作 永田寛定譯 ★
子守唄 シエルラ作 永田寛定譯 ★
希臘羅馬神話 バルフインチ作 野上豐一郎・生子譯 ★★★
フォースタス博士 マーロウ作 松尾相譯 ★
バーンズ詩集 中村爲治譯 ★★
ニヴァンジェリン ロングフェロウ作 豐藤悅子譯 ★
クリスマス・カロル ディッケンス作 森田草平譯 ★
ブラソニング サウル 豐藤勇譯 ★
七大哲人 オイケン著 安倍能成譯 ★★
科學の價値 ポアンカレ著 田邊元譯 ★★
科學と方法 ポアンカレ著 吉田洋一譯 ★★
科學者と詩人 ポアンカレ著 平林初之輔譯 ★★
將來の哲學の根本命題 フォイエルバハ著 植村晋六譯 ★★
史的に見たるスワンテアーレニウス著 科學的宇宙觀の變遷 寺田寅彦譯 ★★
自然認識の限界について デュボアレーモン著 坂田徳男譯 ★
自然に於ける美 ソロヴイコフ著 高村理智夫譯 ★
藝術の一般的意義

ケーベル博士隨筆集 久保勉譯 安倍能成編 ★★
カントとゲエテ ゲエテ 谷川徹三譯 ★
ファーブル昆蟲記 林達夫 山田吉彦譯

既刊 定價 各★★

第二分冊・第九分冊・第十分冊
第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊
第十七分冊・第十八分冊

チャールズ・ダーウヰン F・ダーウヰン著 小泉丹譯 ★★
種の起原 上卷 ダーウヰン著 小泉丹譯 ★★
人及び動物の表情について ダーウヰン著 濱中濱太郎譯 ★★★
雜種植物の研究 メンデル著 小泉丹譯 ★
生命の不可思議上卷 ヘッケル著 後藤格次譯 ★★
生命の不可思議下卷 ヘッケル著 後藤格次譯 ★★
回想のセザンヌ 肯島生馬譯 ★
この人を見よ ニーチエ著 安倍能成譯 ★★
ミル自傳 西本正美譯 ★★
佛蘭西文學史 序ブリュンチエール著 說 關根秀雄譯 ★★
伊太利文藝復興期の文化 ブルックハルト著 村松恒一郎譯 ★★
上卷

ペーター論集 田部重治譯 ★★
ラファエロ・ダ・ヴインチ 谷崎潤一郎・ヘルン東西文學評論 十一 谷義三郎 三宅雪嶺譯 ★★★
戀愛論 上卷 スタンダール著 前川堅市譯 ★★
戀愛論 下卷 スタンダール著 前川堅市譯 ★★
戀愛と結婚 上卷 エレン・ケイ著 原田實譯 ★★
戀愛と結婚 下卷 エレン・ケイ著 原田實譯 ★★
イミターショ・クリスチ（基督のまねび） 內村達三郎譯 ★★
アウグスティンの懺悔錄 フオン・ハルナック著 山谷省吾譯 ★
唯一者とその所有 上卷 スチルネル著 草間平作譯 ★★
唯一者とその所有 下卷 スチルネル著 草間平作譯 ★★
エミイル（第一篇） ルソオ著 平林初之輔譯 ★
エミイル（第二篇） ルソオ著 平林初之輔譯 ★★
エミイル（第三篇） ルソオ著 平林初之輔譯 ★
懺悔錄 上卷 ルソオ著 石川千代松・桑原隲藏譯 ★★
懺悔錄 中卷 ルソオ著 石川千代松・桑原隲藏譯 ★★
懺悔錄 下卷 ルソオ著 石川千代松・桑原隲藏譯 ★★
獨逸國民に告ぐ フイヒテ著 大津康譯 ★★

文明論之概略 福澤諭吉著 ★★

法律・社會・政治・經濟

法の精神 上卷 アリストテレス人の國家原論 宮澤俊義譯 ★★★
法の精神 下卷 モンテスキユー著 宮澤俊義譯 ★★★
權利のための鬪爭 イエーリング著 日沖憲郎譯 ★
民約論 ルソオ著 平林初之輔譯 ★★
國富論 上卷 スミス著 氣賀勘重譯 ★★★
勞働者綱領 ラッサール 小泉信三譯註 ★
資本論初版鈔 マルクス著 木下半治・淺野晃譯 ★★★
哲學の貧困 マルクス著 長谷部文雄譯 ★★
獨逸太人問題を論ず マルクス 久留間鮫造・細川亮一譯 ★
自然神論法上卷 エンゲルス 加古祐二郎譯 ★★
自然神論法下卷 エンゲルス 加古祐二郎・加藤正譯 近刊
住宅問題 エンゲルス著 加田哲二譯 ★★
原始基督教史考 カウツキー著 喜多野清一譯 ★

宗族・私有財産及國家の起源 エンゲルス著 西雅雄譯 ★★
フオイエルバッハ論 エンゲルス著 佐野文夫譯 ★
反デューリング論 上卷 エンゲルス著 長谷部文雄譯 ★★
空想より科學へ エンゲルス著 淺野晃譯 ★
マルクス・エンゲルス傳 リヤザノフ著 長谷部文雄譯 ★★
ドイツチエ・イデオロギー マルクス・エンゲルス著 リヤザノフ編 三木清譯 ★
帝國主義 レーニン著 長谷部文雄譯 ★★
唯物論と經驗批判論 レーニン著 佐野文夫譯 上卷 ★★
唯物論と經驗批判論 レーニン著 佐野文夫譯 中卷 ★★
唯物論と經驗批判論 レーニン著 佐野文夫譯 下卷 ★★
何を爲すべきか レーニン著 平田良衛譯 ★★
經濟學及誤謬之原理 リカアドオ著 小泉信三譯 ★★★
道德の經濟的基礎 シュタウディンガー著 草間平作譯 ★★
藝術經濟論 ラスキン著 西本正美譯 ★★
建築の七燈 ラスキン著 高橋松川譯 ★★
この後の者にも ラスキン著 西本正美譯 ★★
地代論 ロードベルトウス著 山口正吾譯 ★★

人論 上卷 ベーベル著 草間平作譯 ★★
婦人論 下卷 ベーベル著 草間平作譯 ★★
近代民主政治 一ブライス著 松山武譯 ★★★
近代民主政治 二ブライス著 松山武譯 ★★★
近代民主政治 三ブライス著 松山武譯 ★★★
近代民主政治 四ブライス著 松山武譯 ★★★
ギユイ社會學上より見たヨーロッパ『藝術』第一部 大西克禮 小方庸正譯 ★★
ギユイ社會學上より見たヨーロッパ『藝術』第二部上 大西克禮 小方庸正譯 ★★
ギユイ社會學上より見たヨーロッパ『藝術』第二部下 大西克禮 小方庸正譯 ★★
經濟要錄 佐藤信淵著 瀧本誠一校訂 ★

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
□內容の嚴選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、飜譯に於ても最善を期します。
□最低の廉價 出來る丈安く手に入れら

569
14

れる樣に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。

□購求の自由　しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。

□印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。

□體裁は菊半截判、紙裝、平綴百頁畫伯裝幀

□活字は八ポイントを用ひました。

□約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。

□番號はただ發行順に從つて之を追ふものであります。

□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一册なることを示し、百頁づつの分册ではありません。

□送料(及び定價)は左表の通りです。

	定價二十錢	送料二錢
★	四十錢	四錢
★★	六十錢	四錢
★★★	八十錢	六錢
★★★★		
★★★★★		

□御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なのですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割增に願ひます。

◇岩波文庫新刊書目◇

源氏物語 四	島津久基校訂	★★★
三條西家本 榮花物語 中卷	三條西公正校訂	★★
煤煙	森田草平作	★★
支那小說集 通俗古今奇觀	青木正兒譯	★
獅子座の流星群	ロマン・ロラン作 片山敏彥譯	★
神聖家族或は批判的批判の批判	マルクス、エンゲルス著 三木清譯	★★★
史的に見たる科學的宇宙觀の變遷	スワンテ・アーレニウス著 寺田寅彥譯	★★

9

若波

509
14

終